

垂水の文学(一)

『浪の下草』(垂水市教育委員会蔵)

—南九州の国文学関係資料(十七)—

福井 迪子

薩藩では文政十一年、垂水川畑氏の一族の川畑篤実(伊集院兼愷の「すさび草」に見える「川畑篤実家当座」は、恐らく同一人物であろう)によって、島津藩全体の歌集である『松操和歌集』が編纂されたが、それに先だつこと十六年の文化九年正月、末川周山によって垂水地方のみの歌を集めた本歌集『浪の下草』がすでに編まれていた。文化九年という時点での、一地方での歌集編纂は極めて注目にも値するものである。

編者周山の跋文に「此の垂水のさとは、昔より詩、文章、連歌の類は好める者有て今に絶ず。やまと歌のひと道は、ふみたる跡も稀々成しを、ひとりふたり老浪のよるの伴ひに飛鳥井の流のたえくくなる雫をも汲んと、追／＼に寄つどひて」「月雪花に興を催して志を述べ、折句・物の名めける事にいたるまで、よめる歌数今はいひも尽さざるが、されば此道にたづさはり心ざし有者の其言の葉、其俛朽はてんも何となく心に残りて、三つ五つと彼を拾ひ是を集め」て、自らのも撰り入れて「二十余り

の年月をかきよせぬる言草、六つの巻とし」「浪の下草」と名づけたと記されているように、もともと漢詩、漢文、連歌等々の深く地域に根ざしていた垂水の地にあつて、和歌の道としては初めて編まれた『集』であつた。春・夏・秋・冬・恋・雑(雑天象・離別・羈旅・哀傷・神祇・釈教・賀)の部立をもつて整つた編纂となつている。総歌数一五〇一首、女性十一人を含む作者八十二名からなつている。編者晩年の二十余年の蒐収になるが、游江亭なる浦の苦屋を営み、志を同じくする人々との文芸的交友の程が極めて具体的に忍ばれる内容を擁している。

周山は、垂水島津家第九代貴壽公の二男。隠栖して周山と号した。明和七年御番頭、天明元年若年寄。穎娃、鹿児島地頭。父貴壽公から砲術の伝を受け、文武百般に通じ、高潔な人格と相俟つて、垂水の文運隆盛を導いた文化的中心人物であつた。和歌を飛鳥井雅重卿に学び、本書の他にも著述四十余部百七十余巻に及ぶといわれる。その教養の巾広さは、古語研究、技術問答、狂歌や更に『小野物語一睡夢』(絵入全)、『手探志古登』等々、小説らしきものに至るまでに及んでいる(『末川周山遺稿』、『諸家讓略』・『薩陽武鑑』・『薩陽銘鑑』)。

周山の兄に当る垂水島津家十代の貴澄公は、学舎文行館を創設、学問を奨励し、文化八年には自らの漢詩集『廢簾詩稿』七卷三冊を上梓、その三冊目には家臣たちの作四五編を併載し、それを発展させた形で、文化十一年には『垂邑詩集』七卷一冊(伊地知季昵編)の公刊をみている。文化九年正月の周山の本歌集の編纂は、実にこのような上下を一にした

垂水の文化興隆気運の一つとして結実したものであったのである。

それはおそらく、やがて川畑篤実をして薩藩の歌集『松操和歌集』を編ましめるに至るに、少なからぬ影響を与えたこととなったものであらうと思われる。本歌集『浪の下草』はそうした意味でまことに意義深い存在である。

現存する本書は、伊集院兼愷によって文政三年冬に書写された六卷二冊、垂水市教育委員会の蔵本である。本書は半紙本の写本二冊。上・下巻共に縦二二・四cm×横一六・八cm。墨付上巻四六丁、下巻四四丁。現在は改装されているが原表紙は淡青色紙表紙で相当虫損がある。中央に「浪の下草 上」・「浪の下草 下」と打つけ書。袋綴。歌は一行書で歌の下に作者名を記す。詞書は二字・三字下げ、一面一四行。上巻末に「文政三の年 庚辰の冬写之 兼愷」との書写者の署名があり、下巻大尾には、「文化三、のつの年みづのへ申の睦月 浦の苫屋の隠士周山識」とする編者周山の跋文、及び「作者姓名」と入集歌数を記した一覧表、また「詠草総計一千百五十首」その内訳歌数「春二百首、夏百廿五首、秋二百十首、冬百二十首、恋百六十五首、雑三百三十首」と、其後に上巻末と同様「文政三の年庚辰の冬写之 兼愷」との書写者の署名が記されている。詠草総数はほぼ同数ながら、実際には、夏百廿六首、冬百二十一首と一首ずつ多く、雑が三百二十九首と一首少いのが実数である。

本書の翻刻を御許し下さった垂水市教育委員会並びにその労をおとり

いただき種々御世話下さった町田満男氏の御好意に対して、心から御礼申し上げます。

翻 刻

凡例

本文は、原本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便をはかるため左の要領に従った。

- (1) 文字はおおむね現行通用文字に改めた。しかし当時慣用の艸、𪛗、哥、烟など、そのままの文字を用いたものもある。
- (2) 清濁、仮名遣いは原本通りであるが、ミ、ハ、セなどの表記も特に片仮名で残すことはせず通行平仮名で統一した。疑問を感ずる所も敢えて原本通りとしたが、(ママ)を付したところもある。
- (3) わずかながら自筆のみせ消ち・墨消し訂正がみられるが、その部分については訂正された本文で記した。
- (4) 詞書の長文にわたるところには読解の便のために句読点を付した。
- (5) 虫損のため部分的に損なわれていても、残った部分で判読可能な文字には□を付し囗のような形で示した。また、判読不可能に損なわれている箇所は□□で示した。
- (6) 丁付は、^(イ・ウ)のように簡略にした。

浪の下草巻一

春之利

歲中五春

山ハ何ノ年ハ其ノ中に於テ重ク出ヤ主人
 其ノ多クヤリク自其ノ年ヲ去ハキナリ
 年ノ内ハ其ノ日ハ其ノ年ト云ク

五春

五春

草原の中は國より荒れし陂湖の外もまがきん
 歩きの旅も荒れしものをたゞのちよりまがきん
 といふ情言はあやうの中

今要に出る日ハ方々無く座も有ハ神徳の内
位勢太神太に五十音なりルハ的立春日

長例、天の若戸ハ智神代の巫ヤ主帰らん

兼憶

八、政

宗雄

久岐

清方

上卷 卷頭

浪の下草

上卷 表紙

多て露の所見みはるの三輪のしらべはなほくいて
 二十時より五月が夜とせぬ言さ六の法一や
 ちゆりて風龍り似くゆは法のこそとてなまむけり
 ちまきゆりくさの心一うてなましくちかはひたれ

七五五

文化のいづみ

三才圖會

浦の磐石入隠士

國山識

熱卓總計一千五百五十首

春

秋
二百十首

卷一百六十五

辛丑

三百三十四

壬戌三年庚辰冬

美憶

浪の下草 終

下卷 44・才

下巻 42・ウ

浪の下草 上

〔表紙〕

浪の下草卷之一

春之部

歳中立春

1 山／＼はまたふる年の雪の中に霞み兼つ、春や立らん
2 花鳥も色音やいそく白雪のふる年なから春はきにけり
年の内に春立ける日梅の花を見て

貴澄

清方

3 ^{咲そ}そはん色香は嘸な年の中に春もたちえの梅の初花

久救

立春

4 芦原の中つ国より霞む也八隅の外も春や立らん

景雄

5 出る日の影も霞みて天の戸の明る方より春やきぬ^{らん}

兼貞妻

正八幡宮奉納哥の中に

6 くる春に出るひかりはやはらきて塵もくもらぬ神垣の内

久救

伊勢太神宮に五十首哥奉りける時立春日

7 長閑なる天の岩戸の朝日影神代の春や立帰らん

兼愷
(1・オ)

春立けるあしたに

8 とち果し袖の氷もけさよりは解て長閑き春にあひぬる

貴澄

立春川

9 山川の氷もけさは解初て花ちる浪に春やたつらむ

義直

山立春

10 雪の色もよそに隔てけさよりは春の光に霞む山端

昌貞

初春の心を

11 春の色も顕れそめつ西の海や櫛木か原の霞む浪間に

久救

初春霞

12 立初る霞の衣きのふけふかけてはすらしさほの山風

親備

13 消あへぬ雪に重ねて山姫の霞の衣はるはきにけり

清方

初春松

14 たか門もたてし緑の松の葉に千年やこもる宿のはつ春

久救

心翁寺にて詩歌の当座し侍りける時初春鶯

〔ウ〕

15 言の葉の花も匂へと鶯のけさの初音や春告てなく

久救

早春

16 薄霞くもるはかりに立初てまた春浅き山のはの空

貴品
養母

早春山

17 立初る春の光は名のみして霞むやいつこ雪の山端

季翹

18 梓弓春きにけりと武士の矢野の神山けさ霞むらん

兼愷

関早春

19 関の戸もけさは霞の立初てのとけき春に逢坂の山

氏輔

元日の朝雨のふりけるに哥始するとして

20 ふるもけさ長閑成世の春雨に言の葉草も先めくみ南

久救

若水

21 けさはまつ氷も解る若水にのとけき春やくみて知へき

景雄

雪消山色静

22 長閑にも霞みにけりな雪消し山は嵐の名さへ埋れて

毎山有春

23 佐保姫の霞の衣はるの色に立残したる山のはもなし

春風解氷

24 水上のとちし氷□春風にとけて数そふ瀧のしら糸

子日

25 子日せし昔尋ねて今日も又ひくや小松の千世の古道

子日松

26 二葉なる松に契りて幾千世か齡ものへの子日してまし

霞

27 雪消ぬみ山の里は真柴たく烟の末やまつ霞むらん

28 むかひ見る山は鏡の名のみして霞の底に曇る面影

いもせ山の霞みたるを見て

29 中たかの思ひの末といもせ山霞の袖も立隔つらむ

祇園の杜奉納哥の中に遙峯帯晚霞

30 夕日さす高根は雪に顕れて霞にくもるふしの芝山

野霞

31 明渡る嶺は朝日に晴そめて霞によはる野への春風

橋上霞

32 見渡せは絶にし中も一筋の霞につゝくかつらきの橋

33 よさの浦や松ふく風も埋れて霞渡れる天の橋立

河霞

34 はし姫のよるの思ひも晴やらし曙かすむ宇治の川顔

正八幡宮奉納哥の中に霞中瀧

35 くりかへす浪のしら糸たえ／＼に乱れて霞む山の瀧津瀬

海辺霞

36 白浪も立かさなりて浦の名の霞をよする沖つしほかせ

37 こき出てまた程なしとみるか内に消るや霞む浦の釣舟

住吉の浦にて

38 住の江の松の木末に霞む也夕日かゝれる淡路島山

浦の初島の遙に霞みたるを見て

39 倂を何しのふらんさほ姫の霞の袖のうらの初島

江霞

40 芦の葉はつのくむ程もなには江の春を深めて霞む曙

41 吹よする入江の浪も埋れてつのくむ芦に霞む春風

百首哥の中に霞隔遠樹

42 ふる年の雪のなこりも消果て霞に埋む遠の山松

鶯

43 さく梅の花の梢に移りきてなくねも匂ふ窓の鶯

44 谷陰ももれぬ春日に鶯の泪のつらゝけさや解らん

朝鶯

親備

久救

兼貞妻

季虔

同

兼愷

景雄

久救

親備

同

久救妻

親備

- 45 山陰は朝けの霜もとけやらてまた春馴ぬ鶯のこゑ
久救 夕鶯
- 46 梅かえに宿りもしめす夕はへの花にうかれて鶯や鳴
同 月次哥の中に雪中鶯
- 47 さくと見し梢の花も鶯の羽風にもろき春の淡雪
季翹
- 48 春きぬとうつるたか木も白雪の匂はぬ花に鶯^そ鳴
景幹 古巢鶯
- 49 春きてもふるすの雪にとちられてなくねもとけぬ谷の鶯
久救 竹裏鶯
- 50 陰深き緑に馴て呉竹の千世をさへつる窓の鶯
善弼 五社奉納哥に摘若菜
- 51 七草の其数／＼をつむ手にも尽ぬ千年の春そしらる、
久救 若菜隠雪
- 52 つむ袖も分こそ兼れ初若菜同し二葉の雪の下草
兼^妻妻 春雪
- 53 しはしこそ花共みゆれ木の本にちれば消行春の淡雪
昌貞^(4・才) 残雪の心を
- 54 古年のかたみなからもいとふ哉花まつ木々に残るし^ら雪
景雄 霧島社奉納に谷残雪
- 55 谷陰は春のひかりや遅からん猶^うつもる、雪の下草^草
祐陵 餘寒
- 56 打出し春の川浪立かへりさゆる嵐に又氷るらし
氏輔 餘寒月
- 57 霞む夜の影も氷りてふる雪に又寒かへる山のはの月
親備 餘寒風
- 58 寒かへり雪をさそふかやかて又花に匂はん春の山風
季虔
- 59 さほ姫の霞の袖も吹たえて雪けにかへる春の山かせ
実寿 梅の哥の中に
- 60 さく梅の花もさやかに見え初て曙匂ふ窓の春かせ
親備 露暖梅開
- 61 春の霜消し梢は寒からて露にまつさく梅のはつ花
季虔 五社奉納の中に梅風
- 62 世にみちて猶こそ匂へ難波津の言葉の花を伝ふ春かせ
景雄 梅薫風
- 63 中垣の梅の梢やさそふらん花なき宿もにほふ春風
綱光
- 64 たか里の梅の匂ひか袖の上にしはしは^{紛す}よはの春かせ
親郁 藤原兼愷か許より梅の花盛なるよし申遣しける文の奥に、香をとめてとへかし人の梅の花風の心にかてまかせんと申遣し侍りければ、其返しとて
- 65 咲花の匂ひはよそに送る共ちらしな果そ梅の下かせ^せ
兼頭 祇園社奉納に梅残数点雪
- 66 たえ／＼に残る木末のし^ら雪も匂ふそしるへ^梅のはつ花
景雄

夜梅

67 ほのかなる朧月夜の春風に匂ひ霞まぬ窓の梅か^香

重賢

78 六田にて柳の老木を見てよめる
くりかへし幾代の春に霞むらんむつ田の淀の青柳の糸
百首哥の中に春草

兼愷

春歌の中に

68 移りくる軒端の月も袖の上に霞みてにほふ夜半の梅か□

兼貞妻

79 いつしかと春の^{恵もあらは}れて緑にかへる荻の^焼原

親備

夜思梅

69 思ひねの枕の夢は覚^果て心にかほる夜半の梅か、

久救

80 もえ出てうるほふ雨もをやみなくふるから小野、春の若草
天神社奉納の中に澤若草

義直

正八幡宮奉納の中に窓前梅

70 霞むよの月影ながら匂ひきて夢の跡とふ窓の梅か香

親博妻

81 春日さす野沢の氷とけ初て水も緑にもゆる若草

保定^{〔6・オ〕}

梅遠薫

71 吹風のたよりもゆかし夕月よおほつかなくも匂ふ梅か、

義陳

82 花はまた咲ぬ山路の家つとにまつ折はやす春の早蕨

実憑

南北梅花□云事を

72 都には今^を春への色に香にくらふの山もさくや此花

善弼

83 霞む夜は曇るならひの春の月老の涙を何かこつらん

貴澄

柳風

73 閑かなる風を心に春の日の長くもなひく青柳の糸

貴品
養母

84 はなの色に移ろふ^{影も朧}にて雲井に霞む春夜の月

貞如

74 しら露も結ひと、めす青柳の糸に乱る、春の朝風

実堅^{〔ウ〕}

85 をのつから霞むを春の光にて風をもまたし朧夜の月
春月幽

義智

五社奉納哥の中に柳靡風

75 乱る、もとくるもやすし春風のさそふ俣なる青柳の糸

久救妻

86 立へたつ霞の袖の中空に光も薄き春のよの月
河上春月

智盈

同じ題にて読て^遣はすへき由人の許よりこはれて

76 長閑なる世^は春風のふく方になひく柳のいとも乱れす

久救

87 はし姫の袖には猶や霞むらん身をうち川の春のよの月
浦^{春月}

兼愷

水辺柳

77 行水に花田の糸を打はへて浪もあやおる岸の青柳

義智

88 春も又あかしの浦の名をかけて霞める月に塩風ぞ吹
奈良に宿りける夜月を見て

兼迢

89 ふる郷のかたみをとへは三笠山春や昔と霞む月影

兼愷^(ウ)

正八幡宮奉納に庵春雨

幽栖春月

101 いにしへを忍ふに餘る涙かな草のいほりのよはの春雨

昌貞

90 すみ侘る袖の涙に霞む也春や昔の浅茅生の月

季翹

帰雁

91 春霞深き哀も身にそへて心つくしの蓬生のつき

景雄

102 故郷の契あり共今しはし花にやすらへ春の雁かね

同

閑居春月

103 さやかなる声は残りて朧夜の月に霞める雁の一行

親備

92 わひて住む葎の宿は心から霞むも深き春のよの月

義陳

104 忘るなよ花に別る、雁金も月にたのむの秋の契を

春曙

暁帰雁

兼愷

93 月残るあらしの山は顕れて霞む矢田野の春の曙

善弼

105 なく声もさすか名残や有明の月に別れて帰る雁かね

94 花の色はまつ悌に浮ひきて霞そかほる春の明仄

景雄

百首哥の中に深夜帰雁

兼貞妻

春曙雲

95 ふもとなる花もしらみてはのくと明はなれゆく嶺の横雲

兼伯

106 たか中の急く別のならはしになれも夜深く帰る雁金

久救

霧島社奉納の中に浦春曙

帰雁幽

96 いさり火の烟の末も浦の名に霞みて残る浪の明ほの

季達

107 かきすて、帰る名残の一筆や雲井に薄き雁の玉章

同

須磨の浦にて

霧島宮奉納の中に帰雁遙

97 月影も残る夜みせてすまの浦春に霞める浪の曙

季虔^(7・オ)

108 やかて又霞まぬ声のしるへさへ空にきえ行春の雁金

義陳

春雨

春駒

98 花にまち花にいとふもわりなしや咲散比の庭の春雨

季虔

109 若草に芦の花毛も立ましり霞にあさる霧原の駒

久救

春雨のいたくふりける日、涙川を過るとて

野春駒

99 涙川流れそ増る佐保姫の袖岡山の春雨の頃

兼愷

110 もえ出る若葉の草につなかれて所はなれぬ野への春駒

久救妻

庭春雨

雉子

100 ふる郷の苔むす庭も春雨の恵にもれぬ緑をやそふ

景雄

111 春霞よそにへたて、逢事もかた山き、す妻やこふらん

兼貞妻

- 112 子を思ふ道にや迷ふ狩人のゆき、の岡にき、す鳴也
春哥の[中]に 義智〔8・オ〕
- 113 霞たつ外山の桜ほの／＼と明ゆく月にき、す鳴也
野雲雀 兼愷 124 一枝のおる手はゆるせ山さくら心なき名の花にたつ共
須磨の福祥寺にまうて侍りしに、若木の桜となん
名つけて古へ此花をいたく惜みける人の、一枝を
きらは一指を切へし、とかやかひ付しなと人の申
侍りける一木を見て 久救
- 114 さたかにも声そ落くる夕ひはり霞む末野の床はまとはす
桜 久救
- 115 いつまでの春とはしるや桜花色香につくす老の心を
同
- 116 しら雲も花のよそ目に成はて、桜に埋む春の遠山
兼貞妻 125 見る人のたおらぬ春に匂ひきて若木の桜幾世へぬらん
雨中花 兼愷〔9・オ〕
- 117 ちらすともねにこそかへれ糸桜風を心になひく梢は
季虔 126 いささらは花の木陰に立ぬれん雫も袖ににほふ春雨
霞中花 季虔
- 118 日数へて咲そふ俣に奥深き花の盛をみよしの、山
兼伯 127 桜さく山は霞にへたて、もあらしそかほるみ吉の、里
ほころひて匂ふそ[深]き山桜花は霞の袖につ、めと
松間花 義直
- 119 夜の程に花咲ぬらし片岡のあしたの原に匂ふ春風
景雄 128 枝かはす木の間の桜咲しより松の青葉も匂ふ春かせ
晩花 久救
- 120 とひわふる花のしるへにあくかれて幾重分こし嶺の白雲
兼伯 129 まかひこし雲は残らてほの／＼と明ゆく峯の花を分る、
正八幡宮奉納哥の中に春曙花 季虔
- 121 まつ程のつれなかりしも色にかに心そとくる花のした紐
久救 130 月は猶霞みて残る山のはも花よりしらむ春の明仄
清方
- 122 咲をまち散をおしめることわりも忘れてそ向ふ花の盛は
貞如 131 朝日影うつる梢はしら露もこほれてにほふ花の下陰
久救妻
- 近見花 132 朝日影うつる梢はしら露もこほれてにほふ花の下陰
久救妻

山花

133 雨そ、く花の梢に雲消て色もまさきのかつらきの山

久救

〔ウ〕

花盛に初瀬にてよめる

134 さけは又桜かうへの白雲も花になりゆく小初瀬の山

景雄

吉野の花盛見にまかりける道にて

135 にほひくる嵐を花のしるへにてゆく末埋む八重の白雲

兼愷

山路花

136 山賤も心ありてや帰るさの薪にかさす花のひと枝

氏輔

関花

137 行人の心や花にと、むらん戸さ、ぬ春に逢坂の関

貴澄

川花

138 よしの川岸根の桜咲しより影もうきたつ花の白波

兼伯

139 山川のきしねの桜影見えておられぬ水も匂ふ白なみ

季翹

海辺花

140 軒近き磯山さくらさきぬとやあまの袂も香に匂ふらん

昌都
〔10・オ〕

古寺花

141 さく花も日数をあたにふる寺の入相おしき春の夕暮

兼伯

142 山寺の軒端の花をふく風にひ、きも匂ふ入相の鐘

昌貞

花月三十首哥の中に故郷花

143 有し世のすかたや春に残るらん花さく比の志賀の古郷

景雄

故郷夕花

144 ふる郷にさくも老木の色見えて夕はいと、花も露けき

同

山家花

145 世をいとふ山桜戸も此頃の花にはさすか人そ待る、

氏輔

146 日数へて散なん後の淋しさも花にそかこつ春の山住

季虔

閑居花

147 あれ増る蓬か庭も隔なき春の恵や花に咲覧

季翹

庭なる桜をある人の許に移し遣はすとして読る

148 枝高く咲にはふ共家桜賤か垣ねの春な忘れそ

同
〔ウ〕

弥生十八日の当座に花下言志

149 いく春も尽ぬ色香を言の葉の程とし契る花の下陰

親備

遠山の花の霞みたるをみて、年々歳、花相

似歳、年、人不同と云るを思ひ出て

150 春ことに花の色香はかはらぬも老のみるめの霞むはかなさ

久救

惜花の心を

151 散らぬまもしつ心なく措む哉終に移ろふ花の習を

善弼

題しらす

152 なへて世の花に嵐も心せよ庭の一木にいとふのみかは

季翹

落花

153 ちりゆくもなとか嵐のとならん世はならはしの花の一時

景雄

154 散花を猶残さしと吹たて、根にもかへさぬ春の山かせ

親備

風前落花

- 155 木の本はつもりもあへす春風の行衛に消る花のしら雪 兼愷〔11・オ〕
- 花雪
- 156 日をふれはさそはぬ風に先立てをのれとつもる花の白雪 景雄
- 山落花
- 157 散まよふ花を霞に吹ませて風も色あるみよしの、山 季虔
- 嵐山にて落花をよめる 兼愷
- 158 山の名の嵐のとかになしはてんをのつからちる花のつらさも 初瀬にて花の散けるをみて 兼愷
- 159 哀にも花そ散ゆくはつせ山夕をいそく鐘のひ、きに 景雄
- 川落花
- 160 枝なからくたすと見えて吉野川筏にかゝる花のしら浪 久救
- 161 よしの川散ゆく花をしからみにかけてそ匂ふせゝの白浪 昌都
- 花浪と云事を
- 162 ちれは又春を深めて吉野川浅せもわかぬ花の白なみ 貞如
- 立田川にて花の流るゝをみて 〔ウ〕
- 163 是も又渡らはたえんたつ田川風のかけたる花のうき橋 兼愷
- 月次哥の中に花落客稀
- 164 ちれは又とひこし人の跡もなしうつるは花の名残のみかは 妻 兼貞
- ある人庭の花見にまうつへきよし申置侍
- 165 惜めともあたに散ゆく桜花あすまで残せ庭の春かせ 親安 養母
- 166 もろ人の言葉の花も匂ひきて岩間をめくる桃の盃 久救
- 曲水宴と云事を
- 燕
- 167 春ことに馴くる軒のつはめとやこそその古巢を忘れすもとふ 実信
- 野遊系
- 168 蜻蛉の小野の日影にくり出て有かなきかに遊ぶ糸ゆふ 貞如
- 垣堇 兼迢
- 169 ふる郷の垣ねも春はとはれけりひとりすみれの色のゆかりに 〔12・4〕
- 河辺苗代
- 170 せく水も賤か心にまかすらし河辺に近き山田の苗代 種定
- 苗代水
- 171 春雨の恵も深くせきいれて水ゆたか成賤かなはしろ 貴澄
- 172 あらそはてかなたこなたにせき分る水ハ蛙こす賤か苗代 久救
- 蛙
- 173 雨そゝく池の蛙の折をえて汀の草のねにたてゝなく 季昵
- 174 みさひるる池の眞菅のねをたえすなくや蛙の暮深き声 季虔
- 夕蛙
- 175 水ほそきあら田の蛙打わひてなくねも霞む春の夕暮 兼愷
- 霧島の杜奉納哥の中に水辺蛙
- 176 水の面に行衛定めぬ浮草をたのむ陰とや蛙鳴らん 清遙
- 田蛙

- 177 水あせし賤か門田も程／＼にすむや蛙の声ゆたか也
季翹⁽⁷⁾
- 178 苗代蛙
せきいる、苗代水のいやましに蛙なく也春雨の頃
兼伯
- つ、し
- 179 何をさは思ふの岡の岩つつしいはて千入の色に出らん
兼愷
- 松下躑躅
- 180 つれもなき岩ほの松の下つ、し獨こかる、色も露けし
善弼
- 杜若
- 181 真菰草しける野沢のかきつはた緑や花の隔成らむ
同
- 参河の八橋にまかりける時、杜若のわつかに花
咲たるをみて、彼古き物語の事共思ひ出られて
- 182 杜若ゆかりの色に八橋の昔をかけて猶残るらん
季虔
- 歎冬
- 183 くれてゆく春の宿りか山吹のかこふも深き花の八重垣
貴澄
- 五杜奉納哥の中に
久^(13・オ)救
- 184 咲おほふ花にきしねの浪こえて流も匂ふ井手の歎冬
実懿
- 水辺歎冬
- 185 花の香は又も流れて吉野川桜につ、く岸の山吹
久^(13・オ)救
- 川歎冬
- 186 暮てゆく春もよとむか山吹の花にしからむ玉川の水
季翹
- 187 吉野川桜散ゆく岸陰に春やせくらん歎冬の花
昌貞
- 188 やまふきの下ゆく水は埋れて花にかけたる春の川橋
久救
- 垣歎冬
- 189 春ことに植ぞへしとは山吹のいはても匂ふ花のやへ垣
善弼
- 巖頂藤
- 190 所得て千世をねさすや動なき岩ほの松にかゝる藤浪
貞如
- 百首哥に杜藤
- 191 さくら花散にし杜の梢にも春を残してかゝる藤なみ
親備⁽⁷⁾
- 池藤
- 192 咲おほふ岸ねの水に影見えて藤浪よする池の春風
久^(13・オ)救妻
- 193 むらさきの色を深めて池水の底にもよする花の藤浪
清方
- 松上藤
- 194 さく藤の花にうもれて紫の色にそなひく春の松か枝
經福
- 暮春
- 195 散うかふ花は^(13・オ)と吉野川暮ゆく春はせく方もなし
貞如
- 花月雪三十首哥の中に
- 196 さそひゆく嵐の外に恨かな花にうつろふ春の日数は
兼愷
- 暮春雲
- 197 散花のかたみも今は絶々に春くれかゝる嶺のしら雲
親備
- 春の暮に志賀にまかりけるに、花も散すきては
へりしかは

- 198 ちれは又人目も絶てゆく春の故郷さひし志賀の花園 兼愷
(14・オ)
- 三月尽
- 199 けふのみとくるゝにはやき名残哉折しも長き春の日影も 氏輔
- 200 花の色に馴しもあたの契とは弥生の今日の別にそしる 親備
〔ウ〕
- 浪の下草 卷之二
- 夏之部
- 首夏
- 201 見し春の花のしら雲立別れ緑にあくるけさの山端 兼迢
- 首夏風
- 202 若葉ふく風のかほりも昨日まで誘ひし花の名残やはなき 季虔
- 杜首夏
- 203 みし春の花の錦も色かへて夏きにけらし衣手の杜 同
- 更衣のこゝろを
- 204 ぬきかふる花の袂の別路もおしまし物を春に馴すは 清方
- 羈旅更衣
- 205 旅衣かふるも惜きふる郷の春のかたみや花染の袖 季翹
〔ウ〕
- 新樹
- 206 花の色にうかりし風もけさよりはうつる若葉の陰に涼しき 貞如
(15・オ)
- 水辺新樹
- 207 秋ならて若葉も名にや立田川緑をくゝる水の涼しき 久救
〔ウ〕
- 208 色も香も春にもれすは山陰の一本の花よ誰に問れん 実懿
- 正八幡宮奉納の中に尋残花
- 遅桜
- 209 山さくら青葉か底に咲出てあはれ一木に春そ残れる 景雄
- 卯花
- 210 卯花の色よりしらむ朝朗垣ねはかりに月を残して 親郁
- 卯花隠路
- 211 遅桜散しく上にうの花の雪をかさぬる野への通路 季虔
- 籬卯花
- 212 咲うつむさ枝やおもき卯花の雪より底になひく筈は 兼愷
- とある山里の垣ねに卯花の盛に咲たるをみて
- 213 心ありてたかすむ庵そ山陰に世をうの花のかこふ垣ねは 久救
〔ウ〕
- 葵
- 214 昔たれけふのみあれにあふひ草其神山にかさし初剣 貴澄
- 郭公
- 215 惜ましよ鳴すて、ゆけ郭公誰もこよひの初音待らん 季翹
- 待郭公
- 216 つれなくも初音おしむか郭公しみてまつ夜の心くらへに 兼貞妻
- 正八幡宮奉納の中に同じ心を
- 217 郭公たのめもをかぬ夕暮を馴し心に契りてそまつ 種定
- 雨のふり侍りける暁ねさめして

218	ひと声をしゐてや待ん時鳥村雨する夜半のね覺に 卯月初つ方、人／＼まうて来りて、こよひ郭公の はつね鳴待らはむけに聞すて、は置ましき物を、 なと申あひ侍りしかは	久救	229	なれも又ねを残さしと郭公なくや五月のあやめ引比 暁郭公	季虔
219	露はかりこよひはもらせ郭公言の葉草にかゝる初ねを 人伝郭公	同 〔16・オ〕	230	郭公行ゑやいつこ有明の月のなこりに残すひと声 兼貞妻	善弼
220	人つてにきくも嬉しき郭公我にはつらき初音なれ共 初郭公	久救	231	なき捨し名残は共に有明の月も入佐の山ほと、きす まぢ得ては残る夜惜き時鳥月にほのめく一声の空 夕郭公	親備
221	待わひて今とは思ふ雲路より初音嬉しき山郭公 まぢ佗し恨も晴て時鳥はつねほのめく山端の月 霧島の杜奉納の中に聞郭公	親備 清方	232	月遅き深山を出て時鳥かすかにもらす夕暮の声 夜郭公	景之
222	馴きつゝ、老もいとほてよな／＼の寢覺かたらふ山時鳥 月前郭公	昌副	233	待わひてねられぬ夜半は一声も夢とはきかし山郭公 ある夜寢覺しける折から郭公を聞て 忍ひねも寢覺にきけと時鳥さすかまつよの枕とふらん 里郭公	久救
223	待えてもおほつかなしや郭公木の間の月にもらす一声 忍ひ音をもらすは嬉し月影もほのめく軒の山ほと、きす 有明の月の光にさそはれて山ほと、きす今ぞ鳴なる 雲間郭公	景雄 氏寿 種定	234	立花の花ちる里の小夜風になくねも匂ふ山ほと、きす 名にしおふ里は伏見の夢もなし山郭公待夜重ねて 明石の浦に泊りける夜初て郭公を聞て 浪枕わひてあかしの時鳥まつとはなしに初音をそきく 山家郭公	景雄 清方 景雄
224	なき捨し声も高ねに立迷ふ雲に跡なきやま郭公 雨中郭公	兼迢 〔16〕	235	山住の身にはかたらへほと、きす浮世に忍ふ初音なり共 都には猶やまつらん郭公けさ山里にもらすはつねを 郭公一声	兼愷 義智
225	五月雨の空にはなれもふり出てほと、きすきぬねをや鳴らん 五月郭公	善弼	236	待えても思ひそ晴ぬ郭公た、ひと声のむら雨の空	親安
226			237		
227			238		
228			239		
			240		
			241		

242	早苗 打つれてうたふうへの声／＼にふしたつ苗も秋急くらん	久救	253	うへ置し人はのきはのふる郷にさくや昔とにほふたちはな	貴澄
243	争はぬ民の心にゆつりをく畦も緑になひく若苗	氏輔	254	立花の夜深く匂ふ香をとめてね覚の袖に昔をそとふ	義智
244	五杜奉納の中に民戸早苗		255	五杜奉納哥に岡樗	
245	門田なる早苗引うへて民の戸のあけぬ暮ぬと秋急くらし	季達 <small>〔ウ〕</small>	256	五月雨の名残の雲の岡のへに晴ぬ梢や樗さくかけ	種定
246	採早苗		257	五月雨	
247	夕日かけ涼しくはる、村雨の雫の田井に早苗取也	兼愷	258	めつらしき月もしはしの晴間にて又かき曇る五月雨の空	昌貞
248	五月五日		259	飛鳥川日数ふり行五月雨にいくたひかはる瀧瀬成らむ	景雄
249	袖に <small>〔ク〕</small> ふかくる五月の玉の緒も長きあやめのねにや契覧	義智	260	常にみぬ瀧も落きて山高み雲に漲るさみたれの頃	善弼
250	池菖蒲		261	五月雨雲	
251	あやめひく跡の浮草かたよりてさ、浪かはる池の夕かせ	季虔	262	降つゝく空はしなとの風にさへ晴ぬさ月のあめの八重雲	久救
252	簷菖蒲		263	杜五月雨	
253	住あらず律の軒にふきませてあやめもわかぬ五月雨の比	久救	264	下草も浪こそこゆれわたつ海の渚の杜の五月雨の比	景雄
254	あやめ草かやか軒端にふきそへて雫もかはる露の朝風	景雄	265	ぬれてほす隙こそなけれ五月雨の日数重なる衣手の杜	親備
255	盧橘風		266	杜五月雨	
256	立花の咲そふ軒の荒間より光もにほふ月のさよ風	季虔	267	柚人のひかぬ宮木も山川にをのれとくたるさみたれの比	貞如
257	夜盧橘		268	名所哥の中に鈴鹿川	
258	夜を深み我か手枕にかほる也昔忍ふの軒のたちはな	氏輔	269	さみたれの日数ふり行鈴鹿川八十瀬も瀧になりかはる迄	兼愷
259	正八幡宮奉納の中に		270	月次哥に山家五月雨	
260	軒端なる月も袂に移りきて昔にかほる夜半の立花	綱光	271	五月雨に谷の柴橋水こえて浮世にかよふ思ひ出もなし	季翹
261	故郷盧橘	<small>〔18・オ〕</small>	272	五月雨久	

265	晴やらぬ軒の糸水くりかへしいくかへぬらんさみたれの比	兼貞妻
266	今ははやならひになりぬ五月雨の晴ぬ日数の程も忘れて	季虔
	五月雨のふりつゝきける夜、平季虔まうて来りて、	
	いかなる事共にてつれ／＼をすくしけるにやと申	
	侍りしかは	
267	いつ晴て月みん夜半を思ひねの手枕さひし五月雨の比	久救 (19・オ)
	夜水鶏	
268	契らねは待としもなき草の戸を夜半のくるなの何たゝくらん	兼貞妻
	夏月	
269	もり兼る若葉の軒の月影に花にいとひし風そ待るゝ	善弼
270	夏深き木のまに見えていとゝ猶心つくしの短よの月	親備
	夏月易明	
271	風そよく野への小笹の短よに露を残してあくる月影	兼愷
	霧島宮奉納の中に夏月涼	
272	吹わくる軒端の竹の風なから袖に待とる月のすゝしさ	昌貞
	河夏月	
273	山川の早瀬の浪に宿りきて月もよとます明る短夜	義陳
	海辺夏月	
274	夏刈の芦辺をつたふ浦浪によわたる月の影そ短き	季翹 (19)
	樹陰夏月	
275	吹分る風に若葉の隙もれて月も涼しきならの下陰	久救
276	浅茅生の払はぬ庭に咲出て床なつかしき花の夕露	兼伯
277	思ひをく露も哀やふる郷にたかかたみなる撫子の花	景雄
	百首哥の中に籬瞿麦	
278	さかぬ間は同じ笹の夏草も色にわかるゝ床夏のはな	親備
	夏草	
279	しけるともよしや払はてこん秋の花を待見ん庭の夏艸	貴澄
	野夏草	
280	夏草のしけるもうしやあけまきの野への通路跡見えぬ迄	義智
	鴉川	
281	うかひ舟くたす早瀬のみなれ棹さす程もなき短夜の空	兼伯
282	五月やみ迷ふへき身の後の世もしらて川瀬にう舟さすらし	兼愷 (20・オ)
	五社奉納の中に瀬鴉川	
283	うかひ舟さすや早瀬の夕浪にのほり兼たる篝火の影	兼貫
	韻歌百首よみける時照射の心を	
284	ともしさすは山の木々の露よりもはかなや鹿の消やすきみは	兼愷
	螢	
285	飛螢数もみたれて行水にうきて流るゝ影そすゝしさ	貴明室
286	朽にけんもとの沢辺の草の上にゆかり求めて飛螢かも	季虔
	水辺螢	
287	とふ螢浅沢水の浅からぬ思ひありとやもえ渡るらむ	定暁

澗底螢火

288 照月ももらぬ深谷の下水にひとり螢の影や移ろふ

兼貞妻

298 山里のいふせき程もよな／＼の烟にみゆる賤か蚊やり火 安

江螢

289 ねにたてぬ思ひは猶や深き江に浪のよる／＼もゆる螢は

久救

299 をのつからくゆる夕けのもくつ火に分てもたてし浦の蚊遣は 季虔

290 月は早入江の芦の葉隠れに影顯れて螢とひかふ

善弼^(ウ)

300 水無月照日もしらし氷室山もる袖さゆる木々の下風 昌都

池螢

291 飛螢もゆるや深き池水のいひ出かたきよるの思ひに

季昵

301 水清き池の夕風かほる也はすのたち葉の露もこほれて 久救

飛岡天神宮奉納の中に叢間螢

292 ねにたてぬよるの螢の思ひ草しけみか底に影も乱れて

実凭

302 きはひくる野分もかくとゆふ立の草木をしほる音のはけしき 同

窓螢

293 怠りの身をいさめてや飛螢あつめぬ窓も光見すらん

兼愷

303 ちる露に跡もしくれて夕立のなこり涼しき軒のまつ風 兼愷

294 とふ螢竹の葉末の露ながら影そ乱る、窓のさよ風

善弼

304 かきくらしふり行跡の雲間より入日ほのめく夕立の空 智盈^(ウ)

夕貞

295 ましはたく賤かふせ屋の烟にも花はくもらぬ軒の夕貞

久救

305 夕立の雲もはるかになる神の跡はあらはに晴る山端 実比

ある村はつれのひとつ屋に遙に白く見えたる花を、

306 きはひくる音羽の山の夕立にふらぬこなたも風そ涼き 季虔

何やらんと道ゆく人にとひ侍りしに、是なんゆふ

野夕立

貞の花也と申ければ

307 露残る野路のしの原打なひき涼しくはる、夕立の跡 親備

296 こと、へは白きに花の名もしるしをちかた人の宿の夕かほ

同

308 跡は又やかてそはる、旅人のぬれつ、急く野路の夕立 昌貞

五杜奉納の中に蚊遣火

297 月影もさそなすみうき山里のくるれはけふる賤が蚊遣火

景雄^(21・オ)

雨後蟬

里蚊遣火

309 むら雨の晴ゆく杜の梢にも残るはす、し日くらしの声 久救

杜蟬

310 夕日かけくもらぬ杜の木末にもまなしくる、蟬の諸声

保定

322 ふく風も秋のしらへや通ふらん夏をよそなる松の下かけ

義直

正八幡宮奉納に樹陰蟬

311 山のはは夕日なからになく蟬の声よりくる、杜の下陰

義直

323 あつき日も早くれ竹の露見えて葉分涼しき月のさよ風

季虔

夏歌の中に

312 松風も夏の外なる山陰に夕をいそぐ日くらしの声

兼愷

324 身のうさをはらふのみかはみそきして夏も残らぬ袖の川風

昌都

扇

313 打なひく花の千草を移しゑの扇の風そ秋にす、しき

久救

325 みそきするけふは暑さもみな月の夕涼しき加茂の川かせ

氏寿

泉

314 くみわけてすむも濁るものをのつから心にす、し山の下水

季虔

326 年浪も半はすきぬ御祓川ぬさもとまらぬ水の早瀬に

兼愷

315 山里は心す、しくすみ馴て夏にしられぬ庭の遣水

義智

浪の下草 卷之三

納涼

316 月もはやくむ手に宿れ夕浪の音も涼しき松の下水

保定

秋の部
立秋

317 湊江やまたこぬ秋も入汐のさそふかす、し浦の夕風

昌貞

327 今日よりは草木か上の音信も心とかはる秋のはつ風

親備

五社奉納に夜納涼

318 こぬ秋の風もかよひて池水の汀に浪のよるそ涼しき

実堅

328 呉竹のひとよのうちに吹かへてそよくも淋し秋の初風

兼伯

水辺納涼

319 石はしる滝津岩ねの山風にあたりの雨そ袖にす、しき

景雄

329 けさよりは一葉か上にふく風も身にしみ初て秋はきにけり

実懿

樹陰納涼

320 袖に散木々の下露秋かけてゆふへす、しき衣手の杜

兼貞妻

330 一葉ちる木間に見えて月の色も心つくしの秋の初しほ

兼愷

321 なく蟬の声も時雨て袖の上に夕露涼し松の下風

親備

331 ふかき夜の軒の下萩音信て袖に露ちる秋の初かせ

兼貞妻

早秋露

332 散そむる桐の一葉の風ならて袖にまつしる秋の夕露

幽栖秋来と云事を

333 置そむる露のよすかに跡見えて秋はきにけり蓬生の庭

七夕

334 恋渡る程や久しき天の川秋のひとよをたのむ逢瀬は

335 明やすきまたはつ秋の短夜をなと星合の空となし剣

待七夕

336 川風やまつかよふらん星あひのゆふへをいそく鵲のはし

七夕雲

337 逢瀬をも立やへたてん天の川雲吹はらへ秋のはつ風

七夕橋

338 七夕のたえぬ契を世々かけて結びやをきし露の玉橋

七夕の当座に野外七夕

339 名にしおふかた野の天の河水に光やうつす星合の空

七夕舟

340 秋ことに馴し渡りもうき霧にさし迷ふらん天の川舟

七夕糸

341 おりひめの手引の糸のくりかへし結ふこよひの契をやまつ

織女惜別

342 あけやすき名残やおしむ織ひめの雲の衣も嶺に別れて

季翹

(24・オ)

343 たなはたの逢瀬の浪の立別れけさしもぬれん天の羽衣

萩

344 なをさりに思ひなしても淋しきはきく人からの萩の上風

345 深き夜の露は袂に吹こして萩の上葉に残る秋かせ

夕萩風

346 秋といへはつきはならひの夕暮もことはりすくる萩のうは風

正八幡宮奉納哥の中に深夜萩

347 ふくるよのね覚とひきて老か身の枕になる、萩の上かせ

霧島社奉納の中に簷下萩

348 うへ置て身にしむ風の宿りとは契らぬ物を軒の下萩

同じ心を

349 月影のもりくる軒に音たて、猶さやかなる萩の上かせ

野萩

350 咲にはふ野への真萩は紫の花すり衣あすもきてみん

351 なく鹿の泪の露や染ぬらん真萩色つく春日野、原

行路萩

352 かり衣分るもつらし咲花の色にこほる、萩の下露

月次哥の中に萩映水

353 行水に萩の錦をおりはへて流もあやに浪やたつ覧

夕薄

五社奉納の中に七夕後朝

義智

季虔

清方

昌貞

昌副

親傳妻

(25・オ)

保定

貴澄

久救

親備

兼貞妻

季虔

貴品
養母久救
妻「ウ」

実懿

親備

経福

兼貞
妻

氏輔

兼伯

兼愷

354 うき秋はたかならはしとゆふ風に尾花か袖も露けかるらん 兼頭

岡薄

355 わたつ海の渚の岡の秋風に尾花か浪や立さはく覧

兼愷^{〔ウ〕}

女郎花

356 しら露の結ふとすれは女郎花なひくや花の心なるらん

季虔

女郎花露

357 おみなへし心よはくも夕露になひくや仇の名をもいとほて

季翹

百首哥の中に蒔萱

358 をく露もしのに乱れてふく風に下おれいそく野へのかる萱

昌貞

草花露

359 宿りきて花の千種に色かはる秋もさかりの野への白露

久救

風動野花

360 穂になひき露に乱れて百草の花を色なる野への秋風

季虔

句題三十首哥の中に秋蝶護籬花

361 住あらず賤か垣ねよ百草の花はこてふのもるにまかせて

兼愷

槿

362 朝良の花もはかなき露の間を心に千世の齡とやさく

氏輔^{〔オ〕}
(26・オ)

露

363 年ごとに猶かけそへて身ひとつの秋を深むる袖のゆふ露

季虔

364 くる秋をまねく尾花か上よりも先置初る袖の夕露

景雄

朝露

365 さしめくる方は朝日の影とめて光こほる、露の玉さ、

善弼

野径露

366 すむ月にうかる、野への通ひ路は袖に夜寒の露も払はし

清方

原露

367 わけゆけはうらみぬ袖もほしあへす真葛か原の秋の夕露

景幹

田露

368 もる袖もつゝみや兼ん秋の田の稲葉に餘る露の恵を

兼愷

十五夜の当座に

369 小山田の庵もる月も傾きていなはか末になひくしら露

氏輔

五社奉納の中に古郷露

370 いく秋の露の宿りと成ぬらん世にふる郷の庭の浅ちふ

定暁

虫

371 哀さは身にしむ秋の夕とや虫も浅茅か露になくらん

久救

372 物思ふ枕の下の虫のねは露のゆかりをとひきてやなく

兼迢

尋虫声

373 そことなき浅茅か露にとわひて思ひ乱る、虫の声々

親備

虫怨

374 露深き真葛か原の虫のねは夜寒の風にうらみてや鳴

兼貞妻

虫声非一

375 ひと方に聞も定めす鳴虫の声は千草の色にみたれて

親備

正八幡宮奉納哥の中に故郷虫

376	住すて、とはれぬ庭の浅茅生に恨や残るまつ虫の声	兼貞	388	伊勢太神宮に五十首哥奉りける時夜鹿	兼愷
	庭虫			夜寒なる小野のふしとの初霜を月に恨みて鹿や鳴覧	
377	払はねは笹の露も深き夜に虫の音高し庭の浅茅生	久救 (27・オ)	389	妻乞の秋の思ひや長き夜の月にふけゆく小男鹿の声	親陽
	籬下聞虫			なれも又心つくしをねにたて、木間の月に鹿やなくらん	親備
378	百草の花のまかきに鳴虫も思ひの色やかはるこゑく	景雄	390	秋哥の中に	
	鈴虫			高砂の松の嵐も音ふけて傾く月に鹿そなくなる	景雄
379	秋深き神葉の岡の夕露にふりいて、なく鈴虫の声	昌都	391	山鹿	
	蚕			奥山の岩木の中もうき事は秋のならひとしかや鳴らむ	謙愷
380	なく声も枕によはるきりくす我本結の霜さゆる夜は	久救	392	なにとなく身にしむ秋の哀さを外山の鹿のねにたて、なく	季翹 (28・オ)
	祇園社奉納哥に終夜柔蚕声			野外鹿	
381	いく度の寢覚とふらん蚕なくや夜寒の霜の枕に	祐寿	393	露深き草のふしとのうち枯に野風を寒み鹿ぞ鳴なる	種定 兼貞
	促織をよめる			つま恋る野への千草の色く <small>色く</small> に思ひ乱れて鹿や鳴らん	妻
382	秋風も今は夜寒の浅茅生にくりかへしなくはた織の声	久救 妻	394	山家鹿	
	鹿			きく時の哀さなから山里はなかなぬもさひし小男鹿の声	久救
383	たか恋の山路も嘸なくふ笛によるのをしかの四迷ひは	久救	395	百首哥の中に田家鹿	
384	秋よいかに哀深かる山路とて澄のほる月に鹿の鳴らん	季虔	396	露深き稲葉を分てなく鹿は小田もる賤かね覚をやとふ	景雄
385	夜寒なる小野のしの原月ふけて鹿も名残や有明の声	親備 <small>の</small>	397	鹿声遙	
	霧島社奉納の中に暁更鹿			いつことはをのか妻さへ迷ふらん嵐の末のさをしかのこゑ	同
386	ふけぬるか尾上の月ハ影落て鹿の音すめる野への秋かせ	同	398	秋夕	
	夕鹿			袖の露も千くにくたけて物思ふ我身ひとつの秋の夕暮	兼迢
387	折しもあれ秋の夕の妻こひにうきを重ねて鹿や鳴らん	久救	399		

- 400 ふく風の音ハ草木の上ならて心をしほる秋の夕くれ 保定
- 正八幡宮奉納哥に秋夕思
- 401 秋よなと詠め捨てても哀さのしるて身にそふ夕成らん 兼愷⁽⁹⁾
- 秋の夕に雨のふり侍りける時
- 402 何となくうきハ数そふ夕哉桐の落葉に村雨の声 昌貞
- 秋夕露
- 403 袖にまつ秋の哀をかけ初て草木か上も余る夕露 季虔
- 山家秋夕
- 404 友をよふ鳩もねくらを尋きて夕暮さひし秋の山里 久救
- 秋風
- 405 音つれも中／＼うしやうき事を忍ふに餘る軒の秋風 親備
- 野秋風
- 406 ほになひく尾花か末もうら枯て色かはり行野への秋かせ 義陳
- 田秋風
- 407 よもすからひかぬ鳴子の音たて、いなほか末に秋風そふく 氏輔
- 名所哥の中に
- 408 雁のくる伏見の沢田色付て夜寒になりぬ宇治の山風 兼愷^(29・オ)
- 稻妻
- 409 秋の田のほかにみるも露毎に宿りはもれぬ稻妻の影 善弼
- 410 かけろふの小野、浅茅の露の上にはかなく通ふ宵の稻つま 兼愷
- 月
- 411 幾秋も馴て見しよの友そとや老をいとはぬ宿の月影 久救
- 秋ことにかはらぬ友と契りきて月にまどろむ夜半もすくなし 兼伯
- 412 八月三日暮かた月をみて
- 413 照そはん最中の秋の初入にまつほのめかす三か月の影 久救
- 八月十五夜に
- 414 うろくつもかそふる計池水のもなかに澄る秋のよの月 同
- 閏八月十五夜によめる
- 415 かさなれるは月の影もかはらねはいつれを秋の最中とはみん 季虔
- 九月十三夜
- 416 白露も光やみかく玉くしけふた夜名におふ月を宿して 親備⁽⁹⁾
- 立待月
- 417 立よりてすたれか、くる袖の上にやかて待とる月の程なさ 義直
- 深夜月
- 418 はかなしや我身も共にふくるよの月のみあたにしたふ心は 久救
- 月似霜
- 419 すむ影は秋ともいさや白妙の真砂地寒し月の初霜 義陳
- 月前風
- 420 雲払ふ田面の月はさやかにて稲葉に残る秋のさよ風 久救
- 421 も、草の花の露ちる秋風に宿り兼たる野への月影 清方

句題三十首哥の中に月出清風来

422 草木には音せぬ夜半もすむ月の光に寒き袖の秋風

月前雲

423 澄のほる月のあたりは消果て風の末に迷ふ浮雲

十五夜の当座に月前霧

424 山のははそこ共わかす立込て霧分のほる秋のよの月

月前露

425 草深き野原の露の玉ことに光をわけて月そこほる、

426 くる、より千草が上に置初て月を待とる野への白露

雨後月

427 むら雨のすきの板屋のあれまよう又もりかはるよはの月影

山月

428 立迷ふ雲は跡なく吹絶て嵐に残る山のはの月

429 秋かせの払ひもあへぬ山端に雲をのこして出る月影

月出山

430 ふき払ふ嵐の末の浮雲にをくれて昇る山のはの月

檜原月

631 鐘の音はくれ行俣に初せ山ひはらか上に出る月かけ

野月

432 くる、より草の葉ことに影とめて露分のほるむさしの、月

433 露白き浅茅か底の虫のねもさやかに澄る野への月影

434 かけ宿す千草の花の露なから月も乱る、野への秋風

霧島社奉納の中に野外月

435 置餘る野への千草の白露も数あらはれて澄る月かけ

野径月

436 分るにも心は空にあくかれて月にそ迷ふ小野、細路

437 あくかる、月を千里のしるへにて行末とはんむさしの、原

橋月

438 柴人のゆき、は絶て深きよの月すみ渡る嶺のかけ橋

439 中たえし久米路の橋もよ、かけて月の光や澄渡るらん

川月

440 ふくるよのせ、の岩浪音すみて月影寒し秋の山川

五社奉納の中に同じ心を

441 川霧はくる、を俣にや、晴て月になり行水の秋かせ

江月

442 をく露の玉江の芦に宿りきて光をみかく秋夜の月

句題哥の中に江清月近人

443 水清き入江にすめる影ながら結へは手にも月そやとれる

海月

444 すみ渡る月の行衛やしたふらん浦こき出る秋の舟人

海辺月

445 浦人も秋はもしほにくみそへてはこふにあかぬ浪の上の月

久救

〔30・オ〕

種定

善弼

種定

久救
妻

季翹

親備

清方

久救

〔ウ〕

同

兼愷

季虔

氏輔

貞如

貴澄

義智

親備

親郁

季翹

貞如

景雄

季虔

446 心なきあまの筈屋の烟さへ月に吹しくすまの浦風

兼愷

正八幡宮奉納哥の中に同じ心を

447 もしほやく烟の末もかつ消て戸渡る月に浦かせそ吹

景雄

韻歌百首の中に

448 さらに又春の海辺のみるめをもとはしな月のすみ吉の浜

兼愷^(ウ)

浦月

449 心あらは烟なたてそすまの浦のあまのもしほは月に汲共

久救

景雄

450 よな／＼のねられぬ床の浦浪にぬれてやあまの月をみるらん

湖上月

451 秋風に浪や氷をたゝむらん月さえ渡る諏訪の水うみ

季虔

452 うつりくる月の光に山の名の鏡をみかく鳩の海つら

義直

水郷月

453 暮るより浪の浮霧末晴て月すみ渡る淀の川面

久救

山家月

454 くつかつらくる人もなき山里にうらさひしくも月そことゝふ

政易

455 山深き軒の椎柴吹わけて嵐にもるゝ峯の月影

氏輔

456 逃れすむ宿も浮世の外ならて月そとひくる秋の山かけ

清方

百首哥の中に同じ心を

457 契りをく人は音せて山里の木間の月にまつ風をふく

親備^(32・オ)

花月五十首哥の中に

458 松の戸をたゝく嵐も音絶て独み山の月そふけゆく

兼愷

田家月

459 露結ふ小田のかりほのいな筵月と共にやもり明す覧

季道

故郷月

460 すみ捨て人は跡なき故郷の露も宿かる浅ちふの月

親備

古寺月

461 密つむ暁ことの月見ても西に心やすみ染の袖

兼愷

462 山寺のあか井の水の深き夜に月も心をかはしてやすむ

景雄

句題五十首哥の中に江声入秋寺

463 ふもとなる入江の浪の音までもいそ山寺の月にさやけき

兼愷

閑居月

464 さやけさはみしよの俣の影なからうつれはかはる蓬生の月

季翹

465 あるしたにすみうき宿のやへ葎かれすも月の幾夜とふらん

兼愷^(ウ)

閑庭月

466 置餘る露をよすかによな／＼の月そとひくる蓬生の庭

兼頭

窓月

467 くれ竹の葉分の風もさよふけて枕とひ来る窓の月影

氏輔

月前松

468 雲霧の跡は月ふく山風にひとり軒端の松そしくるゝ

季虔

月前草

469 露深き尾花か末に宿りきて光もなひく野への月かけ

親備

470	月前衣 やとりくる月に払はし狩衣分ゆく袖は露深くとも	兼迢	480	雁 はる／＼とをのか越路の夜寒にやたへすきぬらん衣かり金	景雄
471	月前舟 泊舟かたへは笛をふきさして月 <small>□</small> 伴ふ秋のうらひと	季虔	481	初雁 たか中の契忘れす此秋もかけてきつらん雁の玉つさ	義智
472	月五十首会に月前枕 よしさらは露も払はし草枕とてもねぬよの月を宿して	善弼 (33・オ)	482	立迷ふ雲路のやみや深からん友よひかはす初雁の声	義陳
473	詩歌の当座に月前旅懷 ふる郷のかたみにしほる涙とは馴てもしるか袖の月かけ	貞如	483	韻歌百首の中に 露霜の朝けを寒み岡へなるわさ田かり金今やきぬ覽	兼愷
474	月前遠情 別れてし人も心をすますかと月に千里の外や問まし	季虔	484	月前雁 霧はる、門田の末に数見えて月に落くる秋の初かり	久救
475	月夜待人 露わけて哀とひくる人も哉ふくるも惜き蓬生の月	親備	485	あまつ雁同じ高ねの雲間より月を残して落る一行	季虔
476	月の哥の中に うき事も慰む友と秋ことにやとし馴たる袖の月かけ	貴澄	486	雲間初雁 雲間よりけさ見え初る一つらはよみもわかれぬ雁の玉章	親福 (34・オ)
477	惜月 をのつから惜むならひを山端の傾く月にかゝる浮雲	季翹	487	五社奉納の中に湖上雁 鳩の海や是も数かく影見えて浪にはかなき雁の玉章	季虔
478	洲崎落月といへるを 有明の名残今はと沖津洲の真砂地さえて月そ傾く	季虔	488	田雁 霜深き山田のをしね色付て秋風寒み雁はきにけり	親備
479	入後暮月 いる跡をしたふ心のはかなくも山より西の月にうかる、	同 〔ウ〕	489	霧 たつねみん杉のしるしも埋れて霧立迷ふ三輪の山本	経福
			490	朝霧 日影さす野への浅ちふ打なひき露を残してはる、朝霧	久救
				河霧	

491 朝日山出る光も立こめてまた夜を残す宇治の川きり

季虔

492 山のはは嵐に晴てふもと川ひと筋くらき水の朝霧

善弼

河上霧

493 見渡せはせ、の網代木霧こめてひとり晴たるうちの川橋

貴澄

擣衣

494 くるしきは嚙な夜寒の唐衣打たゆむをも哀とそきく

季虔 〔ウ〕

495 をき明す賤かさ、屋の露霜に秋も夜寒の衣うつ也

親備

秋哥の中に

496 里人も今は衣をうつせみのは山の嵐夜寒なるらん

兼愷

正八幡宮奉納に擣寒衣

497 よさむなる霜をかさねて唐衣ふけゆく月にうらみてや打

氏寿

月下擣衣

498 すむ里もや、あらはれて山陰の夜寒の月に衣うつこゑ

貴澄

499 から衣よその袂の露けさもしれはや月に打たゆむらん

季虔

夜擣衣

500 明やらぬ長月の夜の露霜にをきゐて誰か衣打らむ

季達

住吉社に十首哥奉りける時同し心を

501 住吉の松の嵐も夜や寒き遠里小野に衣うつ也

景雄

海辺擣衣

502 塩風も身に寒しとや浦人の浪のよるく衣うつらむ

種定

(35・オ)

里擣衣

503 霜迷ふ鶉の床も夜や寒き衣うつ也ふか草の里

親備

句題三十首哥の中に家々擣秋練

504 たかりも □ぬ夜寒の唐衣同しうらみをかはしてやうつ

兼愷

五社奉納の中に擣衣何方

505 たかりとわかぬ礎もうつ音の哀 □いかて身にはそふ覧

実寿

沢鳴

506 月遅き田面の沢をたつ鳴の羽音もくらき水の夕霧

兼愷

野鶉

507 真萩ちる遠里小野の秋風に床寒からしうつら鳴也

季虔

故郷鶉

508 月ならてすむ人もなき故郷の浅茅か露に鶉鳴なり

義智

菊を

509 うつしうへて花のしめゆふませの内に千世もこもれる

庭の白菊

兼貞女 〔ウ〕

510 をく霜の後もかはらて松か枝に千世や争ふ庭の白菊

義陳

菊露

511 渚となる千世のためしかしら菊の匂ひも深き花の上の露

季虔

水辺菊

512 咲匂ふ谷の流れの底すみて千世の影みる菊の下水

久救

籬菊

513 秋深きまかきの草のうら枯に老せぬ色や霜のしら菊

清方

514	重陽宴の心を けふといへは花の白露くみそへて千年もへなん菊の盃	親備	525	秋深き山路は嘸なしくらん庭のひと木も染る紅葉、 松間紅葉	久救妻
515	紅葉 秋は名に ^{久救妻} 〔た〕つ田の山の夕日影さすか色こき嶺の紅葉、	兼頭	526	立まじる松も常盤の色そ、ふ紅葉を分て染る時雨に	親備
516	夕日かけ染る高ねの紅葉々は時雨ぬ先も色やそふらん	義陳	527	ときはなる岡辺の松も秋の色に染てそか、る鳶の紅葉、	兼頭
517	秋霜といへる事を 鴟のなく栢の立枝の薄紅葉色付そむる秋の初霜	〔久救〕 (36・オ)	528	秋の末つ方にもみちを見て 夕日さす岡辺の松のつた紅葉色こそ増れ秋の名残に	親安養母
518	名所哥の中に 鹿なきて初霜寒し朝霧の立野のまゆみ色かはるらし	兼愷	529	暮秋 惜ましな名残今はの秋の日もた、大かたの夕暮にして	景雄
519	夕紅葉 時雨ゆく跡も夕日や染ぬらんもみち照そふ秋の山端	祐貞	530	なこり猶有明の月のかたみさへ哀程なき秋の別路 秋欲暮	季翹
520	山紅葉 ふりすくる時雨の雲の絶間より夕日移ろふ嶺の紅葉、	義根	531	長月も ^{兼貞妻} 〔か〕ひなき名のみ有明の月にも残る秋そ少き 月次哥の中に暮秋雨	貞如
521	笠取の山は時雨のふるたひに濡て木葉の色増り行	正房	532	小夜時雨いたくなふりそ老らくの秋の別をしたふ枕に	季昵
522	五社奉納哥に杜紅葉 たつ田姫木、の露霜たてぬきにおけるや錦の衣手の杜	義直	533	ゆく秋の名残の露にふりそひて心もしめる袖の村雨 暮秋露	〔兼貞妻〕 (37・オ)
523	霧島社奉納の中に岸紅葉 山 ^{久救} 〔川〕浅せの浪に影見えて色の渚せく岸のもみちは	善弼	534	まねけ共暮ゆく秋はと、まらて尾花か袖に残る夕露 秋の末つ方に虫の鳴をき、て	貞如
524	紅葉写水 ちらぬ間もうつろふ岸の紅葉、に錦をあらふ山川の水	氏輔	535	浅茅原たのみし陰も裏枯てひとよ／＼によはる虫のね 九月尽	久救
	庭紅葉	〔同〕 (3)	536	けふのみの名残はさすか惜まるれ恨馴にし秋の夕も	同

浪の下草 卷之四

冬之部

初冬

537 秋風の宿り馴たる萩のはも又そよさらに冬はきにけり

季虔

538 いっしかと木、の木葉もふりそひて冬立けさの空そしくる、

実比

初冬風

539 けさは早萩の葉分の音枯て時雨をいそく軒の松風

季翹

百首哥の中に初冬時雨

540 冬きぬとつけの枕に老か身のね覚も寒て早しくる也

久救

時雨

541 定めなく山はあしたの雲となり夕は雨としくれてそ行

同

542 散はて、梢さひしき山陰の時雨は今は何を染らむ

季虔

時雨過

543 浮てゆく雲を嵐に先たて、過る時雨の雨そ足とき

(38・オ)

時雨雲

544 ぬれてほす夕日の影もあらし山まなくしくる、雲の衣手

久救

晩時雨

545 物思ふね覚の空に音信て袖の外成時雨ともなし

景雄

霧島宮奉納の中に閨時雨

546 袖ぬらす閨の板間の村時雨幾度老のね覚とふ覽

定暁

落葉

547 紅みの木、の梢はあらはにて真砂の庭に錦をそしく

清方

韻歌百首の中に

548 夢さそふ軒の木葉の音寒てぬれぬ枕に時雨をそ聞

兼愷

霜埋落葉

549 ちれは又梢の色に染かへて紅葉も白き庭のあさ霜

久救

杜落葉

550 染果し信太の杜の紅葉、は散てもちへの錦をやしく

同

谷落葉

551 下水の音もむせひて山風に木葉しからむ谷のうき橋

季虔

552 吹のほる風の末に冬深きみ谷かくれの紅葉をそみる

同

川落葉

553 山川に残れる秋のかたみさへ流れてはやき水の紅葉、

親備

庭落葉

554 払ふとて跡やはみゆる庭の面によその木葉もさそふ山風

季翹

木枯

555 落葉せし木末は絶て軒近き松にそ残るこからし声

種定

556 ちり残る秋のかたみの紅葉、もさそひ果たるけさの木枯

義智

霜

557 風さそふ秋の形見の白露も結ひとめたる野への夕霜

季虔

夕霜

558 木間もる日影もうと暮初て夕霜寒き岡のへの里

久救

竹霜

559 ふけゆけは末葉の霜やおもるらんそよくも□き窓の呉竹

季虔

霧島社奉納哥の中に篠上霜

560 朝風にそよくも寒し小さ、原残るよのまの霜のふり葉は

親福

籬残菊

561 百草の花は跡なき冬枯の筥に残る霜のしら菊

貞如

野寒草

562 人目さへ枯行野への夕霜に残る薄の誰まねくらん

季昵

563 も、草の秋の匂ひも枯はて、霜の花野、色そ淋しき

義直

庭寒草

564 うき秋の風の宿りは枯果て夕霜さやく庭の荻はら

兼迢

枯野

565 夕風の音のみ秋のかたみにて霜の枯野になひく小薄

久救

566 しもかれの野もせは外の色そなき花に分れし秋の千草も

季翹^(ウ)

寒芦

567 しほれ葉は氷にとちて水鳥の頼む陰なき池のむら芦

氏輔

568 なにはなるこやの隔も枯伏て霜を重ねる芦の八重ふき

兼貞妻

夜寒芦

569 難波濁夜さむの月も影更て葉末に氷る霜の村芦

親備

江寒芦

570 うら風の音もよなくよはる也入江の芦の霜にしほれて

氏輔

571 浪にふし霜にしほれて湊江の芦分小舟さはる共なし

清方

五社奉納の中に同じ心を

572 よる浪の音は氷りて湊江の芦の枯葉に浦風そふく

兼貞

氷

573 岩浪もけさは氷のとちはて、音無川の名にや立らん

季翹

574 まつ風やひとりさえ行谷川の浪は音□き夜半の氷に

善弼

正八幡宮奉納哥に氷留流

575 冬きては氷りにけりな行水の音羽の川も名のみ流れて

貞郷

五社奉納の中に谷氷

576 谷川の落葉か上にとち添て氷るも深き水のしからみ

兼貞妻

河氷

577 更ゆけは音もむせひて川のせのよとむ方より先氷る覧

季虔

578 石走る音は氷りて松風にひ、きを残すよるの山川

親備

冬月

579 置かはる露より霜に宿りきて庭によかれぬ浅ちふの月

兼愷

深夜冬月

580 更ゆけは空にも霜や満ぬらん閨もる月の影を寒けき

兼貞妻

山冬月

581 散残る木葉の霜に宿りきて光も氷る山端の月

親備

582 風さそふ木、のこのはあらはにて雪けに曇る軒の月影

種定

河冬月

〔ウ〕

583	宿りくる川瀬の浪も音すみて影すさましき冬夜の月 寒月	久救妻	595	立まよふ川せの浪の夕霧に行ゑもしれす千鳥鳴也 寒夜水鳥	親枚妻
584	木枯の声もよはりて山陰の落葉の霜に氷る月かけ	氏輔	596	払ひかね猶寒からし水鳥のつはさの霜に氷る月影 韻哥百首の中に	久救
585	しら雪も光をみかく山端に氷りて残る有明の月 古寺寒月	親備	597	月にたつ羽音も寒し水鳥のねぬよの床や猶氷るらん 池水鳥	兼愷
586	かねの音も寒る霜よの月更て楨のは白し小初せの山 衾	久救	598	霜払ふをのか羽風も寒からん氷にさはく池の水とり	久救妻 (ウ)
587	寒増る嵐もうしや深き夜の霜をかさぬる閨の衾は 千鳥	貴澄	599	霜枯し汀にむれてをのれのみ青羽重ぬる池の芦鴨 河鴛	季虔
588	こほる夜の浪は音せぬ川風に声もしゐれて千鳥鳴也 (マツ)	長喜	600	山川の流れて浮ふ紅葉、に色や争ふ鴛のひとつれ 雪中残雁	実比
589	月影の清きかはらの河風に夜や寒からし千鳥なく也 天神の社奉納哥に曉千鳥	兼愷	601	越路よりをくれし雁かしら雪のふるの山田に落る一行 網代	親備
590	有明のつきぬ恨になく千鳥別れし妻や猶したふらん 曉に千鳥のなくを聞て	季敦 (41・オ)	602	もる袖も霜を重ねて氷るよの月影寒し宇治のあしろ木 霞	兼貞妻
591	寢覚とふ汀の千□打わひてなくねも□き霜の曙 海辺千鳥	久救	603	霜さやく音たに寒きさ、の葉に霞乱る、庭のゆふかせ 五社奉納の中に霞破夢	昌貞
592	関守も哀ときくか須磨の浦の友なし千鳥月になく声	景雄	604	さそひくる音も霞の幾度か見果ぬ夢の枕とふらん 雪	季昵
593	しほ風に浪も高師の浜千鳥あさる方なく声さはく也 河千鳥	善弼	605	をしなくてふりそふ色もゆたかなる年のしるしや四方の白雪 季	
594	舟よはふ淀の川風身にしみて更行月にちとり鳴なり	兼貞妻	606	雲か、る遠の高ねも斯そとは積るにしろし庭の白雪 景雄 (42・オ)	

玉津島社に十首哥奉りし時初雪

607 ふりそは、道もや^{たえ}ん初雪の友待[□]を人のとへかし

景雄

庭初雪

608 降初て跡おしまるゝ庭の面は人もまたれぬけさのしら雪

貴明室

609 砌なる草のはつかにふり初て真砂にわかぬけさの白雪

氏輔

610 跡つけとふもとはぬも皆人の心ありけり庭の初ゆき

季翹

朝雪

611 時雨つる夜の間の雲は吹絶て初雪白しけさの山かせ

清方

冬のあしたによめる

612 はつ雪のよるの名残もかつ消て朝日におしき軒の玉水

兼愷

夜雪

613 怠りの窓はなか／＼とち果て夢より後も雪に夜深き

季虔

月前雪

614 すみ昇る影も寒けき山端の月に色そふ木ゝの白雪

貴澄^の

山雪

615 日数ふる雪を重ねていや高く雲井のよそにしらむふしのね

久救

616 降うつむ山は青葉の名にも似す木末も雪を俤にして

善弼

617 かり衣裾野をかけてはし鷹のと山をしなみふれる白雪

兼愷

遊江亭の八景とて人／＼題を分ちてよみ侍りける

時、白山曙雪

618 深きよの麓の時雨や、晴て雪より白む山の曙

久救

嶺雪

619 春秋の花も紅葉もふり果て俤かはるみねのしら雪

清方

野雪

620 かれ残る草もみなから埋れて雪に入日の武蔵野、原

久救

621 秋かせに尾花散かふ俤も枯葉に残る野への白ゆき

昌貞

原雪

622 ふみ分し跡もうもれてかち人の入野の原に積るしら雪

兼伯

関雪

623 ふる俤に道は埋れて乗駒の雪になつ[□]る足柄の関

季翹

行路雪

624 駒^とめてをくるゝ友をまつ陰に袖打払ふ雪の下道

久救

海辺雪

625 興津風さそへはさはく汀よりよせてかへらぬ雪の白浪

季翹

626 汀より雪を重ねて磯山の梢につゝく沖津しらなみ

親備

江雪

627 うつもるゝ入江の芦の下折に雪分かよふあまの釣ふね

兼愷

島雪

628 かきくらし晴間も見えぬ浪の上に雪や光の浦の初島

季虔

遠村雪

629 目馴たる杜の梢は埋れて雪にとをちの里もわかれす

久救

百首哥の中に古寺雪

- 630 山里の月と花とにまたれこし人目もたゆるけさのしら雪 季翹〔ウ〕
- 631 鐘の音は嵐の末にくれ果て雪に残れる小初せの山 親備
- 山家雪
- 632 たつねくるしるし計を払はなん雪にうもる、杉の下庵 景雄
- 633 月花にわけてとはれし柴の戸も又とち果る雪の山陰 親備
- 句題十首哥の中に雪の底なる
- 634 山陰はつもるか上に落そひて雪の底なる木、の下庵 久救
- 閑居雪
- 635 つもれた、さらても人のかき分て問へき宿か浅茅生の雪 季虔
- 霧島社奉納の中に閑中雪
- 636 をのつから跡なき庭の浅茅生も積れは雪にいと、淋しき 季翹
- 庭雪
- 637 日にそひて踏分かたき庭の雪ふらはといひし人も待れす 兼愷
- 竹雪
- 638 吹払ふ風はうもれて呉竹のよふかく〔積〕る雪折の声 兼伯〔44・オ〕
- 雪のあしたか〔ら〕すの木末に鳴ゐるをみて
- 639 松杉の梢もわかぬ雪の中にひとりからすの色そ難面き 季虔
- 鷹狩
- 640 たつ鳥もそこしらふの箸鷹をすへ野、暮に帰る狩人 久救
- 641 たか人の袖寒からし狩衣すそ野の雪に鳥立もとめて 善弼
- 鷹狩日暮
- 642 はし鷹のす、の篠原ふみならしあかぬ鳥立にくらす狩人 景雄
- 炭竈烟
- 643 立迷ふ雪けの雲は跡晴て烟そ残るみねの炭かま 久救妻
- 644 しら雪のうつろふ色に炭かまの烟もうすし小野の山本 実懿
- 炉火
- 645 月雪の光に向ふ心さへ夜寒にかはる埋火のもと 兼愷
- 向埋火
- 646 老か身のよなくあかぬ友なれや心とけたる聞のうつみひ 実比〔ウ〕
- 神楽
- 647 天の戸も明方近く置霜にうたふかくらの声そすみ行 兼頭
- 早梅
- 648 鶯もはつねを急け梅か、の春待あへす匂ふ木末に 兼愷
- 歳暮
- 649 老はつる年の名残もをしてるや難波の芦の枯々の身は 久救
- 伊勢太神宮に五十首哥奉りける時同し心を
- 650 よそにのみはかなく暮て行年の月日よいかて身に積る覧 兼愷
- 霧島社奉納の中に年欲暮
- 651 行年も哀程なし老か身にいつまでか、る暮を惜まん 兼伯
- 惜歳暮
- 652 こし方の月日をそへて惜む哉老も積れる年の名残に 祐陵
- 653 惜まる、心もしらて徒に暮行年よなにいそくらむ 兼頭

歳暮雪

654 おしめ 〔共〕日数はあたにふる雪の積りて早く年そ暮行

歳暮澗水

655 谷川の水は氷によとめ共ゆく年浪そせく方もなき

除夜

656 惜めとも春は間近き芦垣のひとよを年の越んとやする

しはすのつもこりの夜読る

657 いつのまに斯惜まる、年の暮や春待兼し折も有しを

文政三年かのへ辰の冬写之

兼愷

二冊之内

浪の下草 下

浪の下草 卷之五

恋之部

初恋

658 おほつかなまた初草のうら若み結ふも浅き露の契は

五社奉納哥の中に同じ心を

〔45・オ〕

兼伯

氏輔

兼貞妻

久救

〔ウ〕

〔46・オ〕

〔表紙〕

659 袖の上にならはぬ露も隙そなきけふ分初る恋の山道

清賢

不言恋

660 しる人もあらしの山の初紅葉また下染の色にいてねは

久救妻

661 いひ出て猶つれなくは中／＼に憑めぬ先や恋しかるへき

兼頭

霧島社奉納に同じ心を

綱光

662 いはてする思ひならしをはかなくもさのみは人に何つ、むらん

思不言恋

定暁

663 えもいはぬ思ひはいか、やまふきの咲出て花の色をみせはや

664 斯とたに〔い〕は垣沼の埋れ水深き心は行方もなし

兼愷〔ウ〕

未言出恋

善弼

665 いつかさていはほに生る葛かつら〔く〕るしと人にし〔せ〕初へき

言出恋

666 今は早打いての浜の浜風によるへしらせよ沖つ〔ら〕舟

季虔

洩初恋

667 しれかしな山下水のせき兼てもらすは深き底の心を

善弼

忍恋

668 つ、め共泪は袖にみちのくの忍ふの乱れ果いかにせん

季昵

669 いつよりか心のよそに成ぬらんおさふる袖に余る泪は

景雄

670 〔下む〕せふ烟の末よいか、せんわか身をうらのあまのもし

義直

忍涙恋

671 独ねのよるはゆるさん我泪忍ふ心のおこたりにして

兼愷

672 よな／＼にとひくる月の影もうし忍ふは深き袖の涙を

昌貞

霧嶋社奉納哥の中に同じ心を

〔ウ〕

673 露のまもゆるさぬ物を袖の上にたか心より落るなみたそ

兼愷

月前忍恋

674 もらさずはとふ共よしや夜半の月物思ふ袖の露の宿りを

兼貞妻

互忍意

675 〔たか〕方の思ひや深き泪川人目つゝ、みの中に流れて

季虔

聞恋

676 をとにのみ聞しなからの橋柱渡らぬ中のいかて恋しき

久救

677 音にきゝしまゝの継橋つきもせすいつ迄人を恋渡るらん

季虔

見恋

678 露深き秋の裾野、初尾花ほのみしよりそ袖は濡にき

保定

不見恋

679 はかなくも千／＼に心をつくはねのみね共とか人の恋しき

久救

通書恋

680 数そは、□そにやちらんと計に言の葉残す露の玉つさ

兼貫
〔2・オ〕

681 かき流す〔わ〕か中川の水茎に残る言葉はくみてしらなん

昌都

帰無書恋

682 衣／＼の袖の別を告しよりことゝふ鳥の跡たにもなし

季虔

尋恋

683 とひきても跡なき宿のしるしとは契らぬ物を鴟の草くき

兼伯

尋縁恋

684 問わひぬ人の心の浅茅原宿りしられぬ露のゆかりは

季翹

685 あまの住む里のしるへの烟さへとふ方もなく浦風そふく

兼愷

祈恋

686 貴船川水の流れの早きせに祈るしるしのとよとむらん

久救妻

五社奉納の中に祈不逢恋

687 くりかへし祈る誠にしめ繩のなひくを人の心ともかな

親郁

祈難逢恋

688 三輪の山祈るしるしも難面くてうき年〔月〕をすきの村立

季翹
〔ウ〕

契空恋

689 深からぬ契をあたにかはしまの水の流れは末もつゝ、かす

久救

契後世恋

690 言の葉のかはらぬ色を呉竹の後のよかけて猶や契らん

季虔

夢中契恋

691 夢とても何かはかなき小夜枕かはすはそれも契りならずや

同

月次哥の中に馴恋

692 すまの海士の浪かけ衣ころもへて馴行俣に袖そ濡そふ

清方

増恋

693 いとゝ猶思ひますほの花薄なひくも深き露の契りに

善弼

逐日増恋

694 さのみなと袖の時雨の日にそひて思ひの色を染増らん

季虔

憑恋

695 かはり行世のことはりに憑みん難面き中も思ひよはらて 久救〔3・4〕

696 行末の危き中もしゐて猶木曾の梯かけてたのまん 貞如

憑誓言恋

697 ことの葉は定めなき世のならひにも頼む誠を神は忘れし 景雄

不逢恋

698 今はた、つらさにたへぬ命共あはては告ん便りたになし 兼愷

699 呉竹の難面き色を契にてつゐに逢夜の一ふしもなき 善弼

700 身の科に思ひなしてや慰めん逢みぬ中につもる恨も 義陳

五社奉納の中に契不逢恋

701 くりかへし憑む契のかひもなし幾夜あはての杜のしめ縄 義直

句題三十首哥の中に相逢是何日

702 熏衣重ぬる袖に宿れとはいづれの夜半の月に契らん 兼愷

待恋

702 今は只おもひやたえん閨の戸をさゝてまつよの月も傾く 氏輔

704 心にもあらで幾度詠むらん待夜ふけ行有あけの月 兼愷〔6〕

連夜待恋

705 我も又心つよさを幾夜々かつれなき人にならひてそまつ 久救

706 たのめしは過し一夜の偽をいく暁に待よはるらむ 兼愷

待空恋

707 別路に聞し恨も数ならすまつよあた成鳥の八声は 季虔

708 今こんと契し人はつれなくて袖の露とふ在明の月 季翹

709 さのみはと我心よう憑めてもこぬ夜数そふ鶏のこゑ 種定

逢恋

710 今よりは契重ねん年月のうらみにかはる夜半のさ衣 親備

初逢恋

711 行末も隔てぬ中を頼む哉けふとけそむる下紐のせき 兼頭

夢逢恋

712 名残あれや逢みる夢の契さへ夜深き鳥の声に別れて 定

飛岡天神宮奉納の中に同じ心を

713 おもひねの夢の契は跡絶てむなしき床に残る面かけ 義智

別恋

714 衣／＼の空につれなき鳥かねはたか別より鳴初めけん 景雄

715 共に見し跡のかたみに慰めん別れに残れ袖の月かけ 義智

惜別恋

716 影をたにとゝめぬ人の別路は月にもおしき有明の空 種定

急別恋

717 鳥かねにかこつことはの残る夜を明しも果ぬきぬ／＼の空 兼伯

後朝恋

718 あかなくに起別たる朝ね髪みたれてのみや物思ふへき 景雄

後朝切恋

719 今ははや消んとそ思ふ朝露のをきて別れし袖の名残に 季虔

逢不会恋

720 独ねの床に待とる鳥のねを又別路にきく夜半も哉

兼貞妻「ウ

721 今は又たか別路をさそふらん恨み馴にし庭鳥のこゑ

親備

玉津島社に十首哥奉りし時同じ心を

722 衣／＼の空に別れし袖の月又めぐりあふ夕暮もかな

景雄

韻歌百首の中に

723 おも影の跡なき夢をしたふ哉見し夜の月にめぐりあひても

兼愷

名立恋

724 浮名さへ立にけるかな白雲のなひかぬ中をかこつ余りに

同

725 うらむへき方こそなけれすまの海士のもしほの烟空に立名を

義智

霧島社奉納哥に同じ心を

726 袖の上の泪とひこし月影や空にうき名をもらし初けん

貞郷

無名恋

727 わか方になひかぬ物を夕烟いかて浮名の空にたつらむ

親備

借人名恋

728 いささらはよそにやからん名のりその靡く心を我にたのみて
「(5・オ)

兼愷

顕恋

728 思はすよりそめふしの一夜にも小田のひつちのほに出んとは

季虔

730 もれし名を誰に恨みん袖の露忍ひもあへぬ心浅さに

義智

五社奉納に依涙顕恋

736 流れ行浮名はつらし泪川袖のしからみせきもとめなて

親備

被厭恋

732 浦浪のあたにもくたく心哉なきたる朝の身をも思はて

季虔

変恋

733 けふは身のうきせにかはる飛鳥川昨日の淵を何たのみけん

氏輔

片思

734 人は猶いな湊の塩風に身をうら舟のよる方もなし

清方

忘恋

735 年月をふるの野中の忘れ水結ふ契の末もとをとらて

季虔

被忘恋の心を

736 いつよりか余所になひきて忘草人の心に生しけるらん

善弼

難忘恋

737 わりなしや同じ軒端に見し草の忘れも果す忍ふ心は

季虔

絶恋

738 ひとことの恨をかくといは橋の絶にし中はたよりたになき

同

739 ねをそなく今はこぬみの浜千鳥跡もたえ行人のつらさに

嘉春

絶久恋

740 かけてしれ絶にし中の橋柱昔なからに恋渡るとは

久救

絶恨恋

741 こりすまのうらみはそはし夕烟よそになひかぬ心也せは

親備

742 結びをく露の契も枯はて、うらみにたへぬ葛の下かせ

義直

恨身恋

- 743 人をのみ恨みははてし小夜衣うき身の科を思ひかへせは 氏輔
恨久恋
- 744 海士衣うらみ重ねて朽よとやうき年なみの仇にこゆ覧 親備
幼恋
- 745 契りをく行末かけて若草のまた結はれぬ露そこほる、 兼愷
暁恋
- 746 鳥かねに有し別の思はれて枕露けき暁のとき 親好
夕恋
- 747 今はた、うき夕暮の空憑め身のならはしに待もはかなき 兼伯
748 なをさりにいひし言葉もしみて猶心に契る夕暮のそら 景雄
祇園社奉納の中に空閨残燭夜
- 749 まつ人の影たに見えす更る夜に心もよはる閨のともしひ 保定
憂恋
- 750 逢事の夢も見はてす明にけり契りやいかに短夜の空 季虔
秋恋
- 751 吹かはる人の心の秋風に身は消かへる袖のゆふ露 兼貞妻
752 人とは、秋のならひといひなしてさのみは袖の露も忍はし 親備
冬恋
- 753 涙せく袖の氷をかたしきて独やねなん霜のさむしろ 季昵
恋涙
- 754 いか、せんもるも忍ふも身ひとつの心になふ涙ならねは 清方
- 755 恋夢と云事を 義智
寄月恋
- 756 見初ては心空なるみか月のよひくことにおもかけそ、ふ 季虔
757 袖の上にとひくる影をしるへとはたのめぬ人も月にこひしき 同
758 かはらしといひし其夜の俤も忘れかたみの有明のつき 兼愷
寄雲恋
- 759 はかなしや浮名は空にたつ雲の消も果なて物思ふ身は 昌貞
寄烟恋
- 760 わか方になひかはよしや津の国のあしやの烟名にはたつとも久救 兼貞妻
761 しるやいかに忍ふの浦の夕烟立名を空にくゆりわふとは 景雄
762 蟹のすむ里のしるへのかひもなし思はぬ方になひく烟は 義陳
763 下むせふ思ひの烟消かへり逢みぬ中の名にや立へき
韻歌百首の中に
- 764 なひくへき人の心も憑まれす我のみくゆる胸のけふりは 兼愷
寄霞恋
- 765 あたし名の立ともよしや春霞よそに隔ぬ契なりせは 氏輔
寄雨恋
- 766 しるや人胸の烟も晴間なく泪の雨に袖しほるとは 尚政
寄山恋
- 767 立のほる思ひにつく山そなきふしの烟も風になひきて 季虔

- 768 生しけるなけきもこりす恋の山いかてあやなくふみ迷ふ覧 善弼
 名所哥よみ待りける中に筑波山 〔(7)〕
- 769 思ひ入かひこそなけれ筑波山は山しけ山しけきはりに 親備
 寄杜恋
- 770 はつ時雨そめし思ひも色見えすまたはつかしの杜の言のは 久救
 色に出て物や思ふと人とは、いかにいは田のもりのことの葉 季虔
- 771 寄野恋
- 772 逢事も今はなつ野、草の原しけさはりをあたにかこちて 同
 寄関恋
- 773 せきあへぬ泪はうしや別路に又逢坂の名をたのみても 季翹
 寄橋恋
- 774 今はた、我のみかよふ心哉みしやひとよの夢の浮橋 兼愷
 寄水恋
- 775 いさ、らは谷の下水打出てみなきる袖の渚を見せはや 氏輔
 しれかしな忍ふ思ひの埋れ水木葉か下にわきかへるとは 季翹
- 776 寄池恋
 〔(8・オ)〕
- 777 思ひのみ益田の池のうきぬなはうきにはたえぬねそなけれける 季昵
 浅しとやよそにも見えん池水のいひ出かたき底の心は 清方
- 778 寄海恋
- 779 憑まれぬ人の心の奥の海塩の満干とかはる契りに 久救
- 780 かはくまもなみこそさはけ床の海みるめもからて沈む思ひに 季虔
 寄浜恋
- 781 いか、せん人はこぬみの浜風に袖こす浪のくたくこ、ろを 義直
 寄磯恋
- 782 しるらめや浪のよるひる荒磯のいはてくたくる思ひ有とは 兼伯
 寄井恋
- 783 埋れ井の深き心をそれそ共いはぬに誰かくみて知へき 久救
 寄草恋
- 784 秋深き人の心の浅茅原たのみし中もうらかれてゆく 同
 ほに出ぬ尾花かもとの思ひ草いつよりなひく心をも見ん 親備〔(9)〕
- 785 寄忍草恋
- 786 見せはやな限りもしらす忍ふ草たれ故ならぬ露の乱れを 兼貞妻
 寄菊恋
- 787 千世かけて枯ぬ契を結び置ん霜より後の菊を例に 義陳
- 788 人しれす入江に生る菅のねの長くも下に恋やわたらん 景雄
 寄竹恋
- 789 呉竹の一夜の枕かりにたにかはさぬふしの有もつれなき 氏輔
 寄木恋 久救妻
- 790 こりすまにもゆる思ひのかひもなし我身をうらのあまのもしほ木 兼愷
 花月五十首哥読ける時寄松恋

- 791 憑めても人は音せぬよひ／＼に身のならはしとまつ風そふく
寄鳥恋
- 792 へたてすむ山鳥の尾のます鏡移ろふ中にねをのみそなく 親備〔9・4〕
- 793 ふみかよふ跡たにもなし浜千鳥浪のよる／＼ねのみなかれて 種定
- 寄鶏恋
- 794 別路にうらみ馴ても頼む哉かけのたれ尾の長き契を 久救
- 寄鷹恋
- 795 ためのもつゐに馴こぬ簗鷹の野守の鏡みるかけもなし 貞如
- 寄獸恋
- 796 ねにたてぬ思ひは深き夏山のとしによるの鹿はかりかは 兼愷
- 寄虫恋
- 797 われからと思へは猶も海士のかるうきもつらきも身をそはなれぬ 季虔
- 寄鏡恋
- 798 つらさのみ益田の池のひも鏡いつ打解る心をも見ん 久救
- 799 思ひのみますみの鏡あたになと思し涕の身にはそふらん 季昵
- 寄枕恋
- 800 今は只塵も払はし小夜枕又かはすへきちきりならねは 親備〔9〕
- 正八幡宮奉納に同じ心を
- 801 そをたにと夢の契を憑む哉かはさぬ中の夜半の枕に 昌都
- 寄筵恋
- 802 いたつらに恨も塵も積りきてまつよ重ねる床のさむしろ 景幹
- 803 ふしわひぬむなしき床の秋風に露をかたしく夜半の小筵 親備
- 百首哥の中に寄席恋
- 804 あらましに七苜〔附〕をそ払ふ菅筵みふの泪はしき忍ひても 兼愷
- 寄衣恋
- 805 つれなさも猶こりすまの蛭衣恨みて幾夜袖ぬらすらん 氏輔
- 806 かさぬへき夜半もすくなし夏衣薄き契を人にうらみて 親備
- 807 恨みわひねられぬ夜半の唐衣かへすや何のたのみ成らん 兼愷
- 寄糸恋
- 808 いひよらん便もしらすしら糸のあはてや終におもひ乱れん 貴澄
- 809 忍へとも色にや出ん河内女の手染の糸のなかき思ひは 貞如〔10・オ〕
- 810 くりかへし思ふもはかな片糸のあふよもしらぬ恋の乱は 善弼
- 寄車恋
- 810 心から憑むもうしや小車のめくり逢へき契ならぬに 清方
- 寄笛恋
- 812 かりそめのうきねなからも笛竹の一夜とたにもせめて頼ん 季翹
- 寄弓恋
- 813 行末の契もしらすしらま弓心つよくは何たのむらむ 氏輔
- 814 いひよらん行ゑやいつくしらま弓引別れては便たになき 義智
- 百首哥の中に寄書恋
- 815 ちらすなよ忍ふの浦のもしほ草かきやる中のあた浪もうし 兼愷
- 寄舟恋
- 善弼

816 恨みわひぬ余所になる尾のあま小舟よるへも浪の立へたて、は

百首哥読侍りける時寄縄恋

817 今は猶うき田の杜のみしめ縄なひかぬ物を何頼むらん

親備⁽⁹⁾

818 思ひのみつもりをあまの綱手縄くるしと人にしらせてし哉

景雄

寄網恋

819 あみ縄のくるしと余所に恨みてもなとうけひかぬ人の心そ

親備

寄瀧尽恋

820 逢事もなには堀江のみをつくし深き思ひに朽や果南

種定

寄火恋

821 夕烟たつ名もくるし藻屑火のこかれて下に消や果へき

季翹

822 あたになとそむけられたる燈の消も果なて物思ふらん

景雄^(11・オ)

浪の下草 卷之六

雑之部

雑天象

823 ふけゆけは月なき空に雲晴てひとりか、やくあか星の影

久救

風

824 吹音を松に残して塩かまの烟の末になひくうら風

季虔

雲

825 さく花の倂なから春かせに消るやしるへみねのしら雲

親備

826 中空に月を残してこすのとの峯よりしらむ有明の雲

義直

正八幡宮奉納哥の中に薄暮雲

827 有明の空に別し浮雲やくる、高ねに又帰るらん

経福

滄海雲低

828 わたつ海の果しも浪に立つ、く雲や塩路の限成らむ

氏輔

雨

829 春秋の雨は緑やくれなるに同じ梢も染てわかる、

季虔

霧島社奉納に遠村烟

830 きえ残る入日の影も一むらの烟にくる、遠の山□と

清賢

暁

831 庭鳥のねこそなかるれつく／＼と昔を忍ぶ老の寢覚は

兼迢

昼

832 くもる日もめくる葵の花の上にけさをく露のひるまをそしる

季虔

山

833 裾野までふしは高ねの色なれや雪より下もやへの白雲

久救

834 君か代に猶や仰かん筑波根のは山しけ山しけき恵を

種定

長月の半過る頃、富士のすそなる吉原となんいへるに

やとりて、明のあした立出侍りしに、はたへもいたく

ひえ渡りし事の有けるなと物語せしに、或人のいかて

さは寒かりしにやと問侍りければ

⁽¹²⁾

835 時しらぬふしの高ねはいつとても雪よりおろす風の寒けさ

久救

春の頃あつまにまかりける時、富士の山をみやりて

836	時しらぬ雪に其名も顯れて霞の上にはるゝふしのね	季虔	846	春は猶名になかれけり桜川岩こす浪も花を深めて	昌都
	天香久山のほかに霞みたるを見て			春の日記の川を渡りけるによめる	
837	さかき葉のかはらぬ色も埋れて昔に霞む天のかく山	兼愷	847	みなかみの吉野の嵐吹ぬらし浪の花そふ紀路の山川	兼愷
	大和の多武峯にて			涙川を過ける時袖岡山とかや遠からす見え待りけれ	
838	春の色をかたらひ山の桜花霞の袖に何へたつらむ	景雄	848	うきをたれ袖岡山にせき兼て涙の川の名に流るらん	景雄
	春の頃生田の杜にまかりけるに梅花いたくさき満て、			布引の滝見にまかりて	
	ふせる面白かりければ			山姫の手ひきの糸のをりはへて夕日にさらす布引の滝	兼愷
839	秋をのみとふらん人に津の国の生田の杜の春をみせはや	兼愷	849	古寺	
	名所関			こからしにかはらの松も顯れて夕霜寒きみねのふる寺	季翹
840	あふ坂や戸さゝぬ関も鳥のねに起出てこそ人の越らん	景雄		霧島社奉納の中に古寺鐘	
	関残月		851	横檜原かさなる山は埋れて雲よりひゝく入相のかね	実懿
841	鳥か音はあけぬと告る関の戸にまた夜を残す有明の月	兼頭 (13・才)		野寺僧帰と云事を	
	水石歴幾年		852	やとしきて野寺の門やたゝくらん露分帰る袖の月かけ	兼愷
842	苔のむす岩ほの霰せきいれて千世もすむへき宿の池水	季虔		高野寺に宿りける夜月いとあかゝりければ	
	名所池		853	心さへうき世の外にすみ果るたか野の奥の夜半の月影	同
843	いく千年すむも長井の池水や曇りなき代の鏡成らん	清方		故郷	
	池水長澄		854	傾きし軒端の草も秋ふけて忍ふに餘る露のふる郷	季虔
844	水上のたえぬ流をせき入て池のかゝみは千世も曇らし	景雄		山家	
	柚川		855	世をよそに思ひ入にし山陰もうきは逃れぬ松風の声	善弼
845	瀬を早み棹も取あへす柚川の岩こす浪にくたす筏士	久救	856	谷の水みねの嵐の音信は馴てもさひし山の下庵	景雄
	名所川				

857 さひしさもよしやかこたし人とは、世に隠家のかひやなか〔覽〕清方

韻歌百首の中に

858 おもひ入わか山住や浅からん今もうき世にかよふこゝろは 兼愷

山家雨

859 山陰の草の戸ほそは都にて花にいとひし雨もしつけき

久救妻

山家月

860 柴の戸のさしてとひくる人もなし木間の月の光ならては

親備

霧島社奉納哥に山家嵐

861 世のうきに思ひかへすは山里の松の嵐を又やいとはん

兼貞

山家暮嵐

862 聞馴し松の嵐も夕暮は心にさはく山のしたいは

季翹

詩歌の当座し侍りける時山家春暁

863 月花の霞む哀も人とはす明ほのおしき春の山里

景雄

山家橋

864 よの中にかけて思へは山里の朽木の橋よあやうけもなし

親備

伊勢太神宮に五十首哥奉りし時山家路

865 つま木こる我より外の跡もなし苔にとちたる山の下路

兼愷

山家竹

866 誰すみて世のうきふしを隔つらんみ山隠れの宿の呉竹

兼伯

山家鳥

867 山陰はいほりあまたの里ならて猶うとまるゝふくろふの声

久救

山家獸

868 友とのみ馴てもさすか山里は又さひしさのましらなく声

兼迢

869 月影もふけて傾く山里の軒はに落るむさゝひのこゑ

季翹

山家客多といへる心を

870 おもひいて、問くる人も世中をいとふや深き山かけの庵

親備

田家夕

871 をしねほす外面の小田の夕日影さすや庵の暮そ淋しき

兼愷

題しらす

872 もり捨し山田の庵の秋ふけて鳴子に残る風の寒けさ

季虔

閑居の心を

873 心さへ浮世の外にすみなさは深山の奥に宿も求めし

氏輔

浪風いとはけしかりし夜、やつかれか浦の筥屋にと

ふらひ来りける人の、聞馴ぬ俚に、斯さはかしきにや

是を常に閑居といふなるは何故そやと問侍りしかは

874 波風に馴し心を思ひしれ市の中にも隠れ家やなき

久救

苔

875 いく千世もかはらぬ色か動なき岩ほに結ふ苔のみとりは

季翹

祇園社奉納の中に蒼苔満山径

876 人とはぬたか山里のしるへとて苔に残れる谷のかけ道

親備

雨中緑竹

877 木、の色はうつろひかはる時雨にも緑ふりせぬその、呉竹

氏輔

- 878 竹為友
ふしの間もあかて心の友と見ん砌の竹のなをき姿を
- 879 松
塩木にもなさて幾年さかふらん筥屋に近き浦の杉か枝
薄暮松風
月をまつ夕はわきて聞もうし空にしくる、みねの松風
正八幡宮奉納に潤底松
- 880 景雄
881 実比
山水も千年すむへき谷陰にしらへやかよふ松風の声
名所松
- 882 氏輔
をのつから神そ知らん住吉の松の二葉に生初し世を
散うせぬ言葉の種か幾千世の緑も深き和哥の浦松
- 883 季翹
唐崎の松見侍りける時
(16・4)
- 884 兼愷
陰ひたす志賀の浦浪立かへり幾代経ぬらん唐崎の松
鶴
- 885 貞如
砌なる松に千年や契るらん木陰に馴て遊ぶ友つる
- 886 義智
へたてなく浪の立居も呼かはし伴ひなる、和哥の浦鶴
池辺鶴
- 887 久救
妻
末遠く住へき宿の池水に立なる、影や千世の友鶴
正八幡宮奉納の中に芦間鶴
- 888 親枚
妻
霜かれて頼む陰なき芦つ、の薄きやわふる鶴の毛衣
鶴声近
- 889 兼迢
なくたつも子を思ふやみや深きよの老のね覚に声通ふ也
鶏
- 890 季虔
衣くふ誰に急けとゆふつけの鳥のねしけき暁の空
藤原兼迢か老らくのね覚の友と待なれつ暁
ことの庭鳥の声、とよみ置けるをみて
老ぬれは誰もね覚になく鳥の初声またぬ暁はなし
霧嶋社奉納の中に関路鶏
- 891 久救
892 貞如
いく人に待れてなくや関の戸の明るよ急く鶏の声
江雨鷺飛
- 893 季翹
ふる雨にをのか蓑毛もしほれ芦の入江を渡る鷺の一つら
夜ふけて犬のはえけるを聞て
- 894 兼愷
小夜更て声もけ疎き門の犬戸さ、ぬ代にも何とかむらん
猿
- 895 季昵
木葉ちる山ふところの秋風にはこくむ猿の声も寒けき
龍
- 896 兼愷
岩淵にひそむもやかて折を得は雲井にたつの名をやしられ
弓
- 897 貞如
はなつ矢もすぐ成道を武士の心にひかんあつき弓か
晩鐘
- 898 季虔
けふあすと心もつかて鐘の音をいく夕暮の空に聞らん
正八幡宮奉納の中に閑居燈

899 か、けつ、頼む光も老か世もあたにふけゆく宿の灯

定暁

舟

900 程遠く浪路隔て、行も又同し湊によるの友ふね

善彌

漁舟火

901 月は早しつむ浪路にてらす火の影も数そふ沖の釣舟

兼廉

漁父

902 朝な夕な世をうみ渡るあま人の暇もなみの上にうかれて

実縁

谷樵夫

903 分わふる谷のかけ路の危さも世にはましはの爪木こるらし

季昵

椎夫婦と云る事を

904 送るへき山路の月や頼む覽夕暮ふかくかへる柴人

祐寿〔9〕

傀儡

905 袖ぬれて結ふひとよの契り哉蒼津の原の霧の手枕

兼愷

李夫人

906 なき跡をしたふ心も一筋の烟にかへる人のおも影

親備

許由巢父のうつし絵を見て

907 水かはんそれさへうしやうき事を耳にふれしと洗ふ流は

久救

陶朱公

908 小舟さす其湖の月見ても満れはかくる浮世とやしる

兼愷

孔子

909 仰き、ていよく高き月影にひしりの道は今も曇らす

昌貞

眺望

910 出る日も光をそへて絵島瀾霞色とる浪の朝なき

久救

霧島社奉納の中に夕眺望

911 浪の上はまつ暮初て残る日の光にかふ沖の遠嶋

季敦〔18・才〕

心翁寺詩歌の当座に海辺春望

912 浪の上や霞を分てふく風におもかはり行沖つ島山

季虔

913 うら風のふく跡見えて浪の上にたえく霞む沖の遠嶋

親備

和歌の浦にまかりける時

914 わかの浦の入江の霞立かへり又こそとはめ浪の上の春

兼愷

游江亭に訪ひ来りし人の有けるが、稀成みるめには

得も云はかりなき浦輪のけしき、住馴し身にはさも

有まし、兼ていつれを楽みにするやとふ。皆くる

人ことにさこそ問者の多く待れ。されは、此芦ふき

庵に間もなく軒をならへし筥屋多ければ、たくもの

烟絶すたな引、垣ねに近き汀の浪た、爰もとに立つ

とひて塩くみはこふ浦人の日くのことわさ、釣す

るあまやあひきの声も浜松の嵐にひ、きあひ、海の

面は真帆片帆の舟のゆき〔9〕 かひ、夜は漁の篝火

数あらはれ、汐干の頃は松の林の葉こしに海士の子

の貝拾ふなど、なへてうつし絵をみるかとし。春

の海つら霞いと長閑に、夏は浜風心から猶す、しく、

- 秋の月真砂をてらし、よせ帰る浪に宿れる影さやけく、冬もや、深く積れる雪のあしたは、海こしの遠山日影に向ひか、やくふせる、いつとても面白からすとおもふ折こそなけれ。何かにつけて心をとめ、夜昼明暮こと／＼の海のはとりのなかも、是みなひとつ。年も早七十をこえて、古より稀成命なる、是ひとつ。過にし頃世を逃れしよりこのかた此三つを樂みとするは、彼榮啓期とやらんか三の樂にひとしくこそ、と打笑ひて、斯なん
- 海こしの浦山かけて折／＼のなかもは尽ぬ夕明ほの
久救
(19・4)
- 述懷
- 危さを思ひ忘るな薄氷ふみ、ぬとても世を渡る身は
同
- うけかたき身を徒に過しきて月日計を何歎くらん
景雄
- 憂き事はとても逃れぬ世中をなとあやなくも厭ひ初劍
親備
- 正八幡宮奉納哥の中に独述懷
季翹
- 世のとかになに恨みけん身ひとつの心から成千／＼のつらさを
久救
- 老後述懷
- 世のうさも過こし方も老か身のよはるにつけて思ひもそ、ふ
兼愷
- 憑みこし身のあらましも今はとて老は浮世に慰めそなき
兼愷
- 述懷泪と云事を
- 年月を数へ出れは何となく泪せきあへぬ老の身そつき
定暁
- 暁述懷
久救
- いくたひかか、けそへても老らくのわかよけ行聞のとしひ」
親備
- きく度につかへぬ身をもかこつ哉暁ことの庭鳥の声
夏の頃さる子細の侍りける時
同
- けふいくか晴ぬ思ひの露けさを袖にかそふる五月雨の比
題しらす
- 今は世に秋もくれぬと守捨て山田の鳴子引人もなし
季翹
- 懷旧
兼伯
- したふその親のいさめは昔にて泪そ袖にをき所なき
兼伯
- 懷旧夢
- 哀又さめても忍ふ心かな昔にかへる夢の名残を
親備
- 忍ふ世に又は通はん道もなしあたる夢のた、ちならては
兼愷
- 百首哥の中に懷旧非一
- くりかへしいと忍はる、昔かな一筋ならぬ身のおこたりに
親備
- 弥生十八日に人／＼春懷旧と云るを読ける時
- つたへこし言葉の花の色にかにさすか見ぬ世の春も恋敷
善弼
- 八月廿日、京極中納言のなく成給ひける日なれはと
て、平季虔か許に友とち寄つとひて、秋懷旧の心を
思ひつ、け侍りぬと聞て、彼卿のおはしまに寄ゐて、
庭なる梅の花御覧するに、春の月朧にさし出たるふ

せゐを写し絵にして、梅のはな匂ひをうつすとよま

せ絵へる一首をかひ付たる掛物にそへて遣しける

932 思ひ出よ月も其世をうつし絵の梅かか深き人の言葉に

返し

933 花にそむ昔の人の心まてうつせは移る春のよの月

小倉山の二尊院にまうて侍りけるに、京極中納言の

いとなみ給ひし時雨亭とかやの跡也といひ伝へて、

山の腰にちいさき庵の荒残りて侍りければ

934 言の葉の昔をとへは小倉山時雨し軒の跡そふりぬる

宇治の平等院にまうて侍りしに、古へ頼政三位の埋

木のと読て自害しうせ絵へる跡なりとて、扇の芝と

なんいひ伝ふるを見て

935 言の葉を世、に伝へて埋木の花咲ぬみも名杜朽せね

春の頃明石にて、平忠度朝臣の片腕を埋みたりとい

へる古塚にまかりて、討死の古へおもひ出られけれ

は

936 風に散色香はおしや塚の上に残る老木の花の片枝も

ある夜津の国福原の都のふる跡にまかりたるに、今

はそれとしもなくいたう荒果けるさまを夢に見て程

なく目覚しに、軒端なる松風の音いとはけしかりけ

れは

937 さひしくも松の嵐のふく原や昔の夢の跡も残らて

霧島社奉納の中に思往事

938 怠りは余所の月日になしはて、哀昔を忍はすもかな

往事如夢

939 はかなしや夢と過にし年月を忍ふるけふもあたにくらして

五色の哥とてよみ侍りける時、青

940 呉竹の緑やいつれ下陰の三筋の道も苔にうもれて

黄

941 きしねより影を移して山吹の色はこかねの玉川の水

赤

942 花にさく岡辺の桃の下つ、しうつる夕日も色やあらそふ

白

943 ふり積る浜の真砂の雪の中におり立鷺の色も分れす

黒

944 なくからす翅は見えず山陰にねくら求る夕くれのこゑ

数の題を分ちてよめる哥十首 一

945 岩戸あけし神代の光其俣に曇らて照らす天津日の影

二

946 もろ共になをき心や通ふらん君と臣との世々の行末

三

947 月花に馴こし友よさらに又けさもとへかし庭の初雪

親備

(21・才)

景雄

昌憲

季虔

久救

兼愷

景雄

親備

(22)

景雄

親備

清方

四

948 八重桜梢を風の吹わけてなかはそ花の色も残れる

季虔

五

949 立ならふ陰も木深しいつ本の柳にとつる門の戸さしは

種定

六

950 仰く其心ひとつをそへてこそ五つの道も深きとはしれ

親備

七

951 賢くも残る其名をしたふ哉林の竹のよ、につたへて

氏輔

八

952 卷々の言葉の露も色そへて御法の花や猶匂ふらん

兼愷

九

953 あかつきの鳥の八声に一声を鳴そへて行山ほと、きす

同

十

954 手を折てひらくる花を松か枝の幾かへりとは誰数へけん

季翹

高低と言る事を

955 空の月光やわけて弓張の半は池の底に見ゆらむ

季虔

曲直

956 おもへた、心はなをき呉竹もあたる風に靡くならひを

親備

ある人二首の題をいたしてよませ待りける時

軽重

957 ふる程は風の心にちる雪も積れはおもき松の下おれ

季翹

方円

958 影すめる板井の水の底までも隔てぬ月や満る夜の空

同
(7)

游江亭の当座に儒書仏書の句を題に分ちて

人／＼哥読ける時、孟子 道在邇而求諸遠

959 分わふる高ねの雲に迷ひにきふもとの花は跡に見捨て

久救

書経 弗慮胡獲弗為胡成

960 さく頃と思ひわきても山深くとはすはいかて花を見ましや

兼愷

莊子 虚室生白

961 月のいる跡はむなしとみる程にほの／＼しらむ窓の明ほの

季虔

論語の句を題にて人／＼哥よみはへりける時、

学而篇 過則勿憚改

景雄

962 つるに身は曇りや果ん白玉のかけてもみかくならひしらすは

陽貨篇 性相近也習相遠也

963 もえ出しひとつ緑も秋きては花に千種の色そ分る、

季虔

回文歌

964 白雪は玉にいつれそ手にとれと似てそれついに又はきゆらし

同
(23・オ)

折句歌よめと人の申ける時、藤はかま

965 ふかき夜は近き軒端の花なからかほるはかりの窓の梅か、

親備

雪のふりける夜、雪深しと云を折句にして

966 雪の夜はきくも寒けしふけて猶垣ほの竹の下折の声

久救

平季昵か許に酒すこし海老五十遣はしける時、

二首の折句をよみてそへ侍りし

967 咲そめてけきこそ匂へすきまもるこすの外面にしるき梅か、同

968 枝つたひ久しき友と此花をしたしみきなく鶯の声 同

庭の桜花咲出ける時平季虔か許に、やとに咲し花
とへといふ事を、折句の查冠に置いて読て遣しける

969 山おろし遠く匂は、庭の花さける盛ときてたにもとへ 兼愷

其かへしに、夕つかた花と^はんと云事を、查冠に

置てよみて遣しける

970 ゆふ風は吹もちらすなつかのまと香に匂^ふ花は立寄て見ん 季虔^(ウ)

物の名よみける中に、しやう つ、み ひは

971 はかなしやうきぬの螢終夜もえつ、水にけたぬ思ひは 兼愷

ゐ しか さる

972 端居^猪する袖もいつしか露散て涼しさ増^猿る秋の初かせ 景雄

しやか らうし くし 季虔

973 はかなしやかりの此世と知らうしろやすくも捨かたくして 孔子

平季虔か許より秋立ける日団扇にそへて、昼のうちは暑

さもいまた残りけり、けふより秋の風はふけ共と申し遣

しければ、其かへしに 久救

974 昼のうちはあつさなからも暮るよりあふけは空に秋風そたつ

虫の名十

975 さはり有て。ふけ行のみか。待し。みのあ。ふ夜はいかにかへるさも
うし。

平季虔が母身まかりて、其忌の果ける後、木の名
十をかくし読にして、季虔が許に遣しける

976 過てたつ月日はしはし留まらて影も見えこぬ人か悲しき 兼愷

其かへしに、鳥名十を讀て遣し侍りし

977 おしめ共過し月日はうかりけり先たつ人の猶そ恋しき 季虔

夜の旅まよふは夢かうつの山と云る句を夢の中に

思ひつ、け侍りしか、程なく覺て夜も明方也ければ

978 あけてそこゆるつたの細道 と下の句を付置侍りぬ 久救

庭に松を移し植侍りける頃、夢にて読つる哥

979 いと清き月は端山を分出てほのかにみゆる庭の松かえ 兼貞 母

市木村の浦人の女、程隔たりける山陰の、河原く

すとなん云る所に嫁きけるかよめる

980 浪の音きかすとすれとかはらくす松の嵐の絶る間そなき

鰯をあまたたふへて涎を流しける人を見て戯れに

981 降そ、くあめの名残の梢より匂ひこほる、はなの下露 久救

ある友とちの久しくとふらひ侍らさりければ、いか、
「^(ウ)

わつらひもやあらん、絶て音信もき、侍らぬ、など

申遣しける文の奥に、たはふれに斯なん書添侍りし

982 音信をまつ響の聞えぬは尾上の嵐よりはりもやする 季虔

藤原兼愷か許にて哥の当座の終りに、互に塵の外の心は

へ共物語りつゝ、世捨人よなといひあへりけるか、夜更

て人々帰りなんとせし時、たちよ刀よなと騒きあひ侍り

しかは、或人取あへす、忘れても思ひそ出るとに斯に世

は捨られぬ物にや有らんとたはふれければ

983 捨しとは心はかりよ世中に逃れかたなのみをいか、せん 季翹

藤原綱光が許にあるよ訪ひ行て、物語しける半に綱光眠

催して覚えすふし入侍りしかは、斯なん戯れにかひ付て

帰り侍りける

984 言の葉も今は枯ふす真葛原うらみて帰る野へのさよ風 季虔〔25・オ〕

游江亭にて、ある夜盗人の押入たりとて人く立さはく

と夢見て目覚侍りしかは、たはふれに

985 驚きて夢も覚けりしら波のよるの枕に立さはくにそ 久救

春の初いまた雪も消かてなりけるに、藤原兼愷か許より、

梅の一枝を手折て窓前冒余雪、纔発一枝春、何須惜攀折、

先捧探芳人と云る五言のからうたを添て遣し侍りければ、

其返しに春人の韻をつきて

986 消あへぬ雪の片えにさく梅もをのれ時しる花の初春 同

987 おりてこし梅の一枝の色香より情ぞ深き歌の友人 同

夏の夕、大伴兼頭がまうてくへきよし申置侍りけるに

とはさりければ、よみて遣しける

988 つれなくはまたまし物を村雨の空たのめせし山ほと、きす 景雄

秋の月あか、りける夜人々まうてきて哥読けるに、

季翹か許より、さはる事有て得訪はぬ程に探るへき題に

てもあらは分ちたひてんや、と申遣しけるふみの奥に、

影頼む木の下陰の住居とてへたてな果そ秋のよの月と読

てかきそへ侍りしかは、題を分ちて遣はすとてしるし付

侍りける

989 うしと見て世はそむく共さゝの葉のみ山の月の影は隔てし 季虔

林葉漸紅と云るをよみける時、少し心になはさる事と

も有て、いか、はすへき、思ひよる事もあらまほし、と

兼愷か許に申遣しける

990 染てしも言葉の色の薄ければ今一入の時雨をそまつ 季翹

年の暮近く成て、藤原親安か母の許より桜花の一枝にそ

へて、いたつらに春待あへす散もうしたをるはゆるせ花

の一枝と申遣しける、返しに

991 いたつらに春待あへす散ゆかは手折るもよしや花の一枝 久救妻〔26・オ〕

国の守の御母君六十の御賀に歌奉りける時、短冊にかき

付るとてよめる

992 かく計心はなみのうたかたも和歌の浦輪の名にや立へき 季虔

百首哥よみける時、其つゝみ紙に

993 せめて又光をそふる露もかな色香も薄き野への百草 親備

となんかひ付て見せ侍りしかは、其ひと巻におもひよる
事共いさ、か書しるしてかへし遣はしける時、かく読て
そへはへりし

994 百種の花の色香もうつろはんうき言の葉の露をかけては 久救

歌のよみ方によく弁へしらぬ事有とて、これかれ尋ねと
ふ人の侍りければ、我も老ほれたる身のおほつかなき事
なから、いさ、か申遣しける文のはしに

995 難波にや我も心の引汐にあらはす芦の一ふしもなし 同

ある夜友とちの来りて、歌の事とも物語しつゝ、
かさねてとひくへきよし申かはし侍りけるか、其後
程久しくまうてこさりしかは読て遣しける

「つ」

966 みたれ芦のひとよの程に枯ぬるはあき風やふくなにはつの道 兼保

藤原兼愷が許より、今宵は歌の当座催し南程に必こそと
文おこせたりしに、まいるへきよし申ながら、さはる事
いてきて心の外に打過くして、あけのあしたかく申遣し
ける

997 難波なる芦のひとよをすくしては恨るふしを身にや重ねん 氏輔
かへし

998 かりそめの一夜はよしやあしの葉もさはりな果そ難波つの道 兼愷
兼愷が許に久しくとふらひ侍らさりける比、たか方に心
をよせて和歌の浦の浪の友舟遠さかるらん、と申遣した

りければ、返しとてよめる

999 遠さかる心もつらし和歌の浦の芦分小舟さはりかちにて 兼頭

(27・オ)

藤原氏輔が歌の事につきてさる子細の侍りけるととき、よ
みてつかはしける

1000 いかなれや馴し磯辺の小夜千鳥又異浦の友さそふとは 久救

其かへしとて程へてよみ侍りし

1001 こと浦のみるめをかりにかき分て濡し袂そ今は悔しき 氏輔

いかなりける折にか、其子の兼東によみてあたへける歌

1002 迷ふへき道は千筋の山高みのほり初たる跡を忘るな 兼迢

離別

百首歌の中に別の心を

1003 別れては一日ふるにも幾秋の哀を袖の露にかそへん 景雄

藤原兼愷かものにまかりける時遣し侍りし

1004 分ゆかん野山の露に思ひ出よ別れにしほる袖の春雨 親備

伊勢にまかりける時、おきつと云所に宿りて明の

あした立出けるに、あるしの女、漕いて、いつく

に行か沖津舟跡しら浪の名残をそおもふとかひ付

て出しければ、其返しに読る

1005 漕出て心は跡にをきつ舟かへらぬ浪よ立もやられす 久救

秋の頃兼愷に伴ひ旅にまかりけるに、程久しく成て独ふ
る郷に帰るへき事のいてきて、其したくしける夜、兼愷

は歸りもゑせてしはし何かれと名残おしみつつ、羨爾歸
期速、勿々杯酒傾、風霜同旅恨、丘壑負交情、月照行装
淨、鷄催匹馬鳴、別來孤驛夕、獨坐奈秋声とかい付て贈
り侍りしかは、其かへしとて讀る

1006 へたつ共いか、忘^れん諸共に夜寒をわひし袖の秋風 種定

旅におもむき侍りける時、藤原兼貞か妻の許
より手染の糸にそへて、馴そめし契りはけふの
別こそいと、心くるしきとなん申遣したりけれ
は程へて其返しに

〔28・4〕

1007 心さし深く染てし形見そとみる度ことにいと、恋しき 親布女

遙なる境にまかりける時、したしき友とちに別る、とて、
心の中に思ひつ、け侍りし

1008 消やられてめぐり逢へき契ともしらぬ別の道芝の露 兼愷

羈旅
旅歌の中に

1009 ふる郷に歸るひとよの夢もみすまたふし馴ぬ草の枕は 氏輔

1010 しら河の関路こえ行旅人の衣手寒し秋かせやふく 季虔

月前旅

1011 月見ても慰めかたき泪とはふるさと人もかけてしれかし 親備

1012 ふる郷にかけても知かしらぬ野の露分迷ふ袖の月影 清方

春旅

〔29・4〕

1013 行末をしらぬ山路のうきもあらし花にわけ入春の旅人 親備

花盛に鈴鹿山を越るとて

1014 ふりすて、過るも惜き名残かな鈴鹿の山の花の下道 景雄

花の盛なる比吉野にまかりて宿りけるによめる

1015 吉野山ふもとの里はとひ捨て花にひとよの宿りからまし 兼愷

春の頃伊勢にまかりける時、石なはらと云る山里に宿り
けるに、軒近き花の木末に朧夜の月さしいて、ふせゐい
と面白かりける折ふし、あるしの翁出きて心有さまに歌
の事共よろつ物語つ、興しければ

1016 かり枕たのむひとよの月花に情をかはす春の里ひと 景雄

春の初つ方、東にくたり侍りける時、箱根にてと有家に
やすらひしに、いつの頃歸りのほり侍らんやと人のとひ
ければ

1017 歸るさは花に分見ん玉くしけ箱根の山にかゝるしら雲 季虔

かゝりしか共くたりける俚にさる事出きて、春の過るま
て得歸りもせず、夏の初に成てのほり侍りければ、過に
し頃休らひける家の庭なる桜の枝に、かくよみてひひ付
侍りし

1018 悔しくも過し日数に玉匣箱根の山の花は見さりき 季虔

秋旅

1019 草枕秋かせ寒し故郷もねぬよの月に衣うつらむ 兼愷

1030	陰頼む松かね枕夢もなし心をしほる夜半の嵐に	親備 (30・オ)
1028	よなくの月のみ友よ誰か又ことふ野への宿りならねは	昌憲
1028	夢もなき野原の露のたまくらにかりね問くるよはの月影	善弼
1027	ふる郷の人もかたみに詠むらん仮ね露けき袖の月かけ	種定
1025	袖の露も置そふ野への草枕馴て幾夜か結ひきぬらん	兼貞妻
1025	つらさのみ身をしはなれぬ草枕むすへは結ふ袖の夕露	久救
1024	あけは又独やこえんうつつの山月に友なふつたのほそ道	氏輔
1023	旅衣わけ行末も故郷も共にへたつるみねのしら雲	貞如
1022	旅衣わけ行末も故郷も共にへたつるみねのしら雲	貞如
1021	分くらす野へのさ、やのかり枕さすかふしうき霜のさむしろ	景雄
1020	旅衣同しかりねの草のいほもうきにはいか、露けかるらむ	綱光
1020	冬旅	
1020	旅衣同しかりねの草のいほもうきにはいか、露けかるらむ	綱光
1020	ける	
1020	有て此所にさすらへて侍ける、其隣に宿りてかく申遣し	
1020	秋の頃、旅に赴きける折しも、故郷の友とち、さる子細	
1031	露深き野への小さ、のかり枕結ふひとよの夢も短き	兼貞妻
1031	風破旅夢といふ事を	
1032	ふる郷の夢は跡なく吹たえて岩ねの床に残る松かせ	貞如
1032	羈中送日	
1033	秋風もはや吹初てゆく先はまたしら河の関もはるけし	久救
1034	かへり見る故郷遠し野も山もこえし日数の程にしられて	季虔
1035	別こしふるさと人の倂もこ、ろにうつす袖の上の月	親備
1036	ふる郷をさそひて出し夕月も旅ねになる、有明の影	兼愷
1037	日数さへかさなる山を分くれてつかる、駒の足からの関	久救
1038	あつまにまかりける時鈴鹿山を越るとて	
1038	へたてきて幾日になりぬ鈴鹿山ふる郷遠き関の下道	保定 (ウ)
1039	旅衣里とひ兼て分る野にうきをかさぬる袖の夕露	親備
1040	ふる郷の夢はくたけてあら磯の浪の枕に有明の月	昌貞
1041	浦干鳥月にしはなく声寒し浪のうきねに小夜や更ぬる	兼愷
1041	旅泊月	

等閑の別たに猶惜まる、ならひなるを、逝水留むへから
さるの恨を一去不來の名残にかこちて、誰か九廻の腸を
断さらん。茲におゐて六字の名号を初句のかしらにをき、
みたりに感慨の鄙詞をつゝりて、恭々しく尊靈を弔ひ奉
るとしかいふ

〔の〕

1064 長かれと頼む梢のさくら花あはれ常なき春風そ吹

景雄

1065 むかしそと昨日の花の陰とへは袖にこたへぬ露そこほるる

同

1066 あふきこし花の色香は散はて、残るなけきのみをそ恨むる

同

1067 水の上に散行花の跡たえてかへらぬ浪に浮ふおもかけ

同

1068 誰とても思ひかけきや散残る花をみのりの手向なれとは

同

1069 ふりそ、く雨さへつらし散花のはかなき跡をしたふ袂に

同

同じき折、みたりよたりかしらおろし侍りけるに、

をのれもひたすら其事をうつたへ侍りしか共、さは

る事有てねかひもとけ侍らさりければ

1070 惜まれぬわか黒髪よたか為に思ひみたれて猶残るらん

兼愷

1071 いささらは泪に朽よから衣墨染ならぬ袖もはつかし

同

おなし頃月をみて

1072 宿しみる泪にいと、霞みきてなき影さそふ袖の上の月

氏輔

1073 何となく月に覚ゆる俤のあはれこよひは霞ますも哉

季翹
(33・イ)

貴澄君はかなくならせ給ひて後日数へける程に、常
に参りつかへし所をもをの／＼立退くへしなどはか

なく聞え侍りければ、嘉春によりて遣しける

1074 諸共に馴し木陰を立別れいつくの露に袖ぬらすへき

兼愷

かへし

1075 頼みこし其下陰もいか、せんなけきにかはるけふの名残を

嘉春

其後よろつ思ひ出る事多くてよめる

1076 待なれて起いてし物を朝ことにあた成鳥のねそなかけける

兼愷

貴澄君うせ給ひてあけの年、其牌前にて詩歌の当座

会催して、海辺春望といへるを人／＼よみ侍りける

時

1077 をくる、もやかて帆影は白浪の霞に消ん沖の友ふね

久救

みつからつかへ奉りし人の御年もいまたつもり給は

てはかなく成給ひける、其明の年の春御墓所に詣て、

かたはらなる桜花の散けるをみて、彼是思ひ出て

あたにふく嵐もうしや散花の盛もまたぬ春のなこりに

為昌

相しれる人の身まかりて後、其墓所に梅の花を手向

るとて

1079 手向ては袖も露けし梅かえの花よりもろき人の別に

実穩

ある人の身まかりける時墓所まうて、

1080 せめてた、手向る花の白露を苔の下にもかけてしれかし

親備

母のむなしく成ける次の年のふみ月忌日の夜、月の
あか、りければ

したふ其影は残らて秋ことにうしや露とふ袖の上の月

久救

父に別れし時よめる哥ならひに詞

生者心滅のならひ逃るへきにあらす、夢幻泡影のこ
とはり、さる事にこそ、と常は思ひこそりしも、折
にふれ事に臨みては、誰か感慨なかるへきやは。こ
とし文化よつの年八月中のこ、のかの夜

「(34・オ)」

父のなく成給ひし事を思ふに、跡先も取乱してさら
に夢共現とも弁ふへきにあらす。嗚呼哀しき哉や。

ふた、ひ逢奉るへき道にあらされは、よしやた、お
ほんからをしはしたに留め置参らせてんやなと思ひ
し事もいふかひなく拙き事ながら、さならぬ別たに
腸を断ち袖をひたせるにあらずや。兼て今までの御
契としるよしもあらは、かりそめにもおほんかたは
らをさらすつかへまつらん物を、いつ迄も長く久し
き事のやうに思ひなして、何となふおろそかにすく
しつる事の愚かにも又悔しけれ。されは、家の風吹
伝へたることくさにも其倅うつり、水峯の跡書流し
給へるふみにも匂ひ残りて、悲歎の端を起し、ある
は香花を手向つ弔ひ慰る人の多かるも、其徳風の
しからしむるにこそと見る物きく事につきて皆哀慟
の媒となんなれりける。朝の雨に泪を拭ひ夕の風に

「(ウ)」

袂をしほる暇もなくいつしか早四十九日になりぬ。

法のわさいとなみけるつるてに、此程心の中に思ひ
けるふしをそこはかとなくかひつけて、尊灵前（マツ）に備
へ奉るといふ事しかり

1082 なをさらに過こし秋の露けさもけふにとちむる椎柴の袖

季虔

父の身まかりて後、はか所にまうて、

1083 玉の緒の絶にし野へを尋れはこたへぬ露に秋風ぞ吹

兼貞妻

母の思ひに侍りける秋、藤原兼愷か許より、大方の
秋のならひも有物を藤の衣よいか、露けき、と申遣
したりければ、かへし

1084 とはれてはいか、答ん藤衣朽はてぬへき袖のなみたを

兼伯

秋の比、相しれる者の身まかりける由を聞て

1085 けふまではよその哀とゆふ露の消なん老の世を過しぬる

久救

春の頃身まかりける人の塚のほとりを、九月の末つ
かたに通リ侍りし時、逝者は目々に疎しと打吟しけ
る人の有しかは

1086 散花にうかりし風はゆく秋のけふしもうはの空にやはよく

季虔

神無月の末にいやしき者の、父と母とにわかれ侍り
ぬと聞て

1087 哀也枯野の草の末の露もとの雫もともにきゆとは

善弼

母のなく成給ひて後、手馴し鏡の有けるをみて

1097	1096	1095	1094	1093	1092	1091	1090	1089	1088
世々かけて猶こそ祈れ神垣にひくしめ縄の絶ぬ恵を	千早振神のみむろのゆふたすきかけてそ祈る世々の行末	をく霜の白ゆふかけて榊葉のかはらぬ世々を神に祈らん 社頭	くもりなく行末てらせ君か代に仰く神路の山のはの月 寄榊神祇	天てらす神の恵もます鏡今に其世の影を残して 寄月神祇	行水のあはれはかなく消てた、心にうかふ人のおもかけ 神祇	見るたひに袂そぬる、水茎の跡もはかなき人のかたみは ある友とちの身まかりける時	草の原とふも悲しき道芝の露に袂のぬれぬ日はなし 一云 さかさまにとふては帰る	なき跡の泪を袖にさきたて、心そかよふ苔のした道 いときなき子にをくれて、日／＼はか所にまうてける時、心の内に思ひつ、け侍りし	かたみそと向ふ鏡には、き、の有にもあらぬ涕そつき 母の身まかりて後読る
親備	兼伯 (36・オ)	種定	清方	久救	季虔	貞保	兼貞妻	季翹	久救
1108	1107	1106	1105	1104	1103	1102	1101	1099	1098
三笠山さして仰ん春の日の光やはらく神のめくみを	世をてらす神の光も隔なきいなりの山の三つの燈 春日社にて	立かへる入江の浪にやはらけて光ふりせぬ玉津島姫 神祇の哥よみける中に、稲荷	さかへゆく松を例に言の葉の道守るらし住吉の神 住吉の社にて	萬代もたえぬ流の石清水すめるを神の心とそしる 玉津島にまうて、	手に結ふいす、の川のまし水に心の塵も流れてやゆく 石清水にもふて、	をのつから神代をかけて霞む也天てる山の明方の空 五十鈴川にて	いつる日の影も曇らぬ神路山天てらします恵しられて 春のあした伊勢にてよめる	仰け猶神の鳥井のふた柱共にすく成御世のさかへを 伊勢にまうてける時	陰深き神のみかきにたつ杉のすく成世をや猶守るらん 正八幡宮奉納に社頭祝と云る事を
兼愷	清方	景雄	兼愷	景雄 (ウ)	兼愷	景雄	季虔	久救妻	清遙

釋教

- 1119 以觀々昏即昏而朗
山のはにかならずかゝる浮雲ももれてさやけき夜半の月影 久救
- 1120 草木国土悉皆成仏
花にさく四方の草木もをのつからみのりにもれぬことはりそかし 景雄
- 1110 寄月釈教
何とたゝ世のうき雲をかこつらん月は心の外にすましを 景雄
- 1111 法華經提婆品 經於千歳為法故の心を
つかへきて千年もうつる山水に深きみのりや汲て知へき 兼愷
- 1112 寿命品
すみ昇るわしの高ねの月影や後の世かけて猶照すらん 季虔
- 1113 觀持品 我不愛身命
よしさらは消ゆとも何か露の身にかへてもとはん法の道芝 兼愷
- 1114 涅槃經 一切衆生悉有仏性
苔のむす岩間／＼の雫さへ流れてきよき谷川の水 久救
- 1115 不偷盜戒
汀なる塵もひろはし白波の思ひかけてそ名には立らめ 景雄
- 1116 不殺生戒
ともしさすさつおの貞弓引かへし鹿の苑ふの月を求めよ 兼愷
- 1110 不妄語戒
はけしさはうはの空なる風もうしちらしなはてそ言の葉の色 季虔
- 1118 是心是仏といふ事を
迷はすは仏の道もをのつから心の外に尋ぬへきかは 親備
- 1128 寄海祝
雨露ももれぬ恵の折をえてうるほひなひく四方の民草 季昵
- 1127 祇園社奉納の中に君恩如雨露
幾秋も月の光を種として尽せぬ色や言の葉の道 季翹
- 1126 秋ことに光をそへて曇りなき御代の例に月やすむらん
八月十五夜当座に同じ心を 貞如
- 1125 秋祝
世々の春かけて昔に匂ふらんさかふる花のことの葉の道 久救
- 1124 三月十八日人丸影向の当座に春祝
打なひく世はとみ草の八束穂に秋たのもしき秋津国かも 久救
- 1123 祝の心を
かくれにし鶴の林の春の日も残る光や世を照すらん 兼愷
- 1122 賀
法隆寺にまうてける時舍利を拝みて 兼愷
- 1121 哀世は草葉の露に風過て宿りもはてぬ稲妻の影
いなつまの光のまそと身の上を思へは袖の露もはかなし 季虔
- 1120 如露亦如電
如露亦如電 景雄

- 1129 浦舟のゆき、もやすし大海の八重の塩路も浪た、ぬ世は
貴澄
- 名所五十首哥の中に和哥浦
- 1130 浪風も治る御代の折にあひて玉もひろふや和哥の浦人
親備
- 寄松祝
- 1131 言の葉の色もそひ行春風に千世をしらふる和歌の浦松
兼頭
- 文化二つの年のきさらき
「ウ
- 国の守の御母君六十の御賀に寄松祝の心を
- 1132 松かえももれぬ恵の深緑君か千年をちきるのみかは
貴澄
- 1133 けふよりは君か齢の行末をまつの千年に契りてやみん
貴品
- 1134 末遠き君か恵に色やそふ千世をみきりの松の栄も
養母
- 二十とせ余り世を遠さけ鄙の住居して侍りしか、同
し御賀にやつかれもよみて奉るへきよし仰こと有け
れは、忝さに同じ心をよみて奉るとて
- 1135 君か恵あまねき世とて山陰に年ふる松も緑をそそふ
久救
- おなし御賀に哥奉れと有ければ、同じく寄松祝とい
へるをよみて奉りける
- 1136 君か齢尽ぬためしや陰深く千世の数そふ松のことは
久救 妻
- 1137 砌なる松の千年も限りあらし君に相生の陰をならへて
祐陵
- 1138 行末はも、えの松の百かへり君に契らんよろつ代の春
定暁
- 1139 陰くらき深谷の松も折をえて君か千年の数に引れん
兼貞 妻
(39・オ)
- 1140 折にあひてけふはことさらふく風も松にしらふる萬代の声
季翹
- 1141 けふは猶千世の光や^みかく覧玉松かえの春のことは
親備
- 1142 契り置て君そ数へん行末を花さく松の幾かへりとは
清方
- 久救七十の賀に同じ心を
- 1143 いく千世も君か砌に立馴て松より高き齢をやへん
実比
- 1144 移し植る君かそのふの姫小松十回までの花も待見ん
貞如
- 1145 千世かけて仰く緑も言の葉の老せぬ色や和哥の浦松
親備
- 1146 ちり失ぬ松のことは数の^くに君か千年を契りをかまし
義直
- 1147 行末を君に契りて砌なる松も千年の色やそふらむ
義陳
- 父の八十の賀に同じ心を
- 1148 幾世々も齢は朽し十回の松のも、たひおひかはるまで
季虔
- 九月九日、平季昵か八十の賀し侍りけるとき、
寄菊祝の心をよみて遣しける
- 1149 折にあひて猶汲そへよ菊の酒八十の後の千世の齢を
久救^ウ
- 寄道祝
- 1150 遺たるを拾はぬ御代は行人の心の道も直きをそしる
兼愷
- 1151 よろつ代の末もしられて言の葉の道榮へ行芦原の国
季虔
- (以下余白)
- 物かはり星移りては、ふりにし事も聞伝ふるより長く絶さるは、水茎
のかき流したるにしかし。我も過にし天明の丙午の頃より、此地西山
と云るに閑居して年月を送り、折折は山陰にさまよひ花紅葉に日をも
(40・オ)

くらし、又春秋の露をわけ草にたはれて野もせに遊び、今又前の浜辺

に藻塩やく海土と軒をならへ、朝夕詠ことなる汀に近く芦のあみ戸に

雨つゆをしのきて、浦の筥屋と呼び、ある時は小舟に棹さし漁夫と共

に釣をたれ、浪の立居も老の身の腰折ながら其事々によせて口すさひ

に心を慰めしも、元より難波津の道しるへと頼みし故大納言雅重卿昔

とならせ給へは今はよしなく、猶芦つゝの薄き方に成行しか」⁽⁶⁾

此垂水のさとは昔より詩・文章・連歌の類は好める者有て今に絶す。や

まと歌のひと道はふみたる跡も稀々成しを、ひとりふたり老浪のよる

の伴ひに飛鳥井の流のたえ／＼なる雫をも汲んと、追／＼に寄つとひ

て当座に二三首の題を分ちてそれをつゝり、いつとなく折にふれ事に臨

みて、中に含めるの情を外にあらはし、月雪花に興を催して志を述へ、

折句・物の名めける事にいたるまでよめる歌数今はいひも尽さゝるか、

されは、此道にたつさはり心さし有者の其言の葉、其伧朽はてんも何

となく心に残りて、三つ五つと彼を拾ひ是を集め、或は過にし連歌師

の読たると聞伝へしのみならず「鳥羽玉の夢に思ひつゝ、けし」^(41・オ)

萬て尋ね求め、みつからの「年頃かひ」^{付置}たるをも多りいれて、二十

余りの年月をか「きよせぬる言草、六の巻」し、物らしけれども風雅に

似たれは、浪の下草と名つけ置侍りぬ。これもゆく／＼志ひとしふし

て見る人もあらはさひはひならむかし。

文化こゝのつの年

みつのへ申の睦月

浦の筥屋の隠士

周山 識

作者姓名 凡八十二人

島津美作貴澄 廿一首 梅本伝右衛門実堅 二首

島津長門貴品 一首 郡司喜兵衛綱光 四首

島津貴品養母 四首 増永龍右衛門氏輔 四十首

島津貴明 室 二首 伊集院兼貞妻 三十六首

末川周山久救 百五十五首 安山四郎右衛門親福 二首

末川久救妻 二十二首 安山親博妻 二首

町田大雅実裕 一首 伊地知宗右衛門季虔 百三十二首

町田賀右衛門実憑 一首 黒木四郎太経福 四首

伊集院隠山兼迢 十三首 蘭牟田周右衛門貞如 廿四首

伊地知休意重賢 一首 長谷元伯保定 十首

安山仲左衛門親陽 一首 伊地知隆仙季翹 五十五首

厚地勘五左衛門政易 一首 長友庄藏善弼 三十八首

伊地知貞右衛門季道 一首 梅本権之丞実懿 六首

梅本六郎右衛門実縁 一首 吉井助「右」衛門嘉春 二首

上原段右衛門尚政 一首 桑波田孫右衛門景幹 三首

鞍岡弥兵衛親好 一首 安山親枚妻 〇首

関善左衛門正房 一首 増水嘉「左」衛門氏寿 三首

安藤源左衛門祐貞 一首 山下嘉次右衛門清遙 二首

高野喜左衛門昌憲	二首	梅本轍実凭	一首	橋口伴藏兼貫	一首	河井田善助義陳	十三首
肝付權角兼保	一首	立山百人清賢	二首	藺牟田半太貞郷	二首	市木村浦人女	一首
杉之尾新左衛門実信	一首	渚之上猪右衛門季敦	二首	詠草總計	一千百五十首		
渡辺次兵衛安	一首	川上六郎兵衛親郁	四首	春	二百首	夏	百廿五首
中条弥平次義根	一首	宮原源左衛門景雄	八十六首	秋	二百十首	冬	百二十首
肝付平兵衛兼廉	一首	肝付啓迪兼頭	十二首	恋	百六十五首	雜	三百三十首
伊集院兼貞母	一首	谷山市右衛門智盈	二首				
伊地知大隱季昵	十三首	田中休之進種定	二十首	文政三の年	庚辰の冬写之		
友重九八左衛門昌副	二首	安山親布女	一首				兼愷
山下蘇童清脩	一首	安山 ^代 七郎親備	百首	浪の下草	終		
浜田金左衛門貞保	一首	伊集院吉左衛門兼愷	百三十首				
鳥原與左衛門定暁	七首	山下喜万太清方	三十首	二冊之内			
梅本多喜右衛門実比	七首	内田正昌貞	十九首				
永野元龍祐陵	三首	梅本一三二実寿	三首				
肝付平左衛門兼伯	廿四首	桑波田龍瑞景之	一首				
江藤八郎兵衛為昌	一首	安山三左衛門親安	一首				
安山親安養母	二首	伊地知佐源次季達	三首				
伊集院八兵衛兼貞	三首	伊集院兼貞女	一首				
若松奥之丞長喜	一首	宮田清右衛門祐寿 ^町	二首				
高野恕兵衛昌都	八首	河井田仲助義直	十五首				
梅本七郎兵衛実穩	一首	河井田善五郎義智	三十首				